

川島忠之助家のばあい

江戸の地霊・東京の地縁

塩崎文雄 所員／表現学部教授

——はじめに。

川島忠之助という銀行家があった。横浜正金銀行に勤め、日清戦争が終わるころまで長くリヨンの地に駐在していた。帰国後も大正半ばまで、東京支店長などの要職にあった。その一方で、ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』の翻訳者として日本近代文学史の第一頁にその名を留めている。

川島忠之助が入手した地所・家作史料をみる機会を得た。本郷区丸山福山町をはじめ、牛込区喜久井町、豊島区池袋二丁目、板橋区石神井谷原町、目黒区三田、千葉県東葛飾郡浦安町猫実^{ねこざね}、同長生郡一宮町城ノ内、静岡県足柄下郡吉浜村蓬ヶ平などがそれにあたる。こうした地所・家作の取得と経営とは、銀行引退後の資産保全ないし資産運用として行われたが、その取得のありかたは都市〈東京〉における土地集約のサンプルとして興味深い。

そればかりではない。わたくしどもが併行して調査を進めている中央区湊一丁目の『福井家文書』にみえる下町地域の土地経営のケースとあいまって、さまざまな課題を提供してくれる。関東大震災と東京大空襲というふたつの災禍によって、それらの蓄積が烏有^{うゆう}に帰したり、復興事業の一環として推し進められた区画整理事業や、戦時下における建物強制疎開、さらには戦後復興のなかで過重に課せられた財産税などといった〈公〉の復興事業に便乗もしくは抵抗するかたちで、〈私〉の生活は紡がれてきたからである。

本稿では川島忠之助のひととなりと事績を尋ねることによって、土地集約の実態を解明するとともに、東京という都市に幕末から昭和をかけて生きた知識人のくらし向きと生活文化を浮き彫りにすることに重きを置いた。また、忠之助の妻と嫁という立場にあったふたりの女性が記した家計簿を通して、その事績に側面から光をあててみた。

川島家におけるふたつの災禍からの復興のころみについては、他日を期したい。

1 — 消えた翻訳家

この^{はいせい}孛星が、不思議な人間厭嫌の光を放つてフランス文学の^{かす}大空を掠めたのは、一八七〇年より七三年まで、十六歳で、既に天才の表現を獲得してから、十九歳で、自らその美神を絞殺するに至るまで、僅かに三年の期間である。この間に、彼の怪物的早熟性が残した処（略）が、今日、十九世紀フランスの詞華集に、無類の宝玉を与へてゐる事を思ふ時、ランボオの出現と消失とは恐らくあらゆる国々、あらゆる世紀を通じて文学上の奇蹟的現象である¹⁾。

小林秀雄の「ランボオ I」巻頭の一節である。詩業を「^{しやくだん}斫断」して砂漠に消えたアルチュール・ランボーのあとを追うかのように、それから10年も経たない明治10年代はじめに、日本で最初のフランス文学の翻訳書『^{新説}八十日間世界一周』前・後編（1878.6、80.6）と『虚無党退治奇談』（1882.9）の三冊を残して、銀行帳簿の蔭に身を匿した^{かく}ひとりの翻訳家がいた。川島忠之助である。

川島忠之助のはあい、その訳業が果たして「天才の表現を獲得して」いたか。みずから手で「美神を絞殺するに至」っていたかは、しばらく問わないでおこう。それというのも、『^{新説}八十日間世界一周』の「伝統的用法から自由」な表現については、^{こな}熟れない漢文訓読体の採用が明治初年の書生たちのあいだで思いがけない成功をもたらしたとする中丸宣明の評価がすでにあるからである²⁾。

また、^{あつめおき}及川益夫が紹介している渡仏直後の1882年（明治15）8月5日付書簡に「此通信は他日の為姉君之御手許へ御集置を被^{くだされたく}下度候」（傍点・ルビとも——引用者）とみえる。依頼をうけて、留守宅を守る姉久和が来信する書簡を親戚知人たちに回覧したのち、受信日（82.10.3）を書き添えた上で紙縫^{こより}で綴じたものが、いまま川島家に残されている³⁾。さらに、同書に収められたヴェルサイユ宮殿やパルム鍾乳洞の見物記は、「家信」というカテゴリーをはるかに超えて、あらかじめ公刊を企図したエスキスと読める。依田学海に送った観劇記『^{仏国演戯}薄命才子』の稿本もまた、同じ類のもの^{たくい}と見做して差しつかえなからう⁴⁾。

にもかかわらず、久和の手によって大切に保管されたそれらの稿本が「他日」

1) 小林秀雄「ランボオ I」『仏蘭西文学研究』第1号、1926.10。のち各種全集収録。

2) 中丸宣明「『新説 八十日間世界一周』の位置」『新日本古典文学大系 明治編15 翻訳小説集二』岩波書店、2002.1.30「解説」。

3) 及川益夫『川島忠之助からの便り——明治十年代横浜正金銀行リヨン出張所にて』皓星社、2012.2.29。

4) 『仏国演戯 薄命才子』（『明治文化資料叢書』第9巻、風間書房、1959.10.25）は、忠之助の稿本に学海が朱筆を入れたものである。筐底に秘されたこの稿本は、柳田泉によってはじめて世に問われた。

日の目を見るに至らなかったのは、フランス駐在が長引くにつれてエスキスの賞味期限も切れ、筆者の感興の鮮度も落ちて、あらためて上梓する意欲を当の忠之助本人が沮喪してしまったためにほかなるまい。

川島忠之助は上に掲げた三冊の訳書を残して、1882年（明治15）に横浜正金銀行員としてリヨンに赴き、足かけ14年の長きにわたってかの地に暮した。井上勤や森田思軒らによる『浮城月世界旅行』や『鐘海底旅行』などの出版もあずかって、ジュール・ヴェルヌに代表される空想科学小説ブームは明治20年代に最盛期を迎える。しかし、リヨンの地で銀行業務に励んだのとはうらはらに、忠之助がこれらのブームに関与した形跡は見あたらない。帰国後も有能な銀行家として社会的地歩を固めることはあっても、フランス紹介やフランス文学翻訳の筆を執ることは二度となかった。そうした足跡の不思議な暗合に、小林秀雄のランボー論の有名な書き出しを思い起したのである。

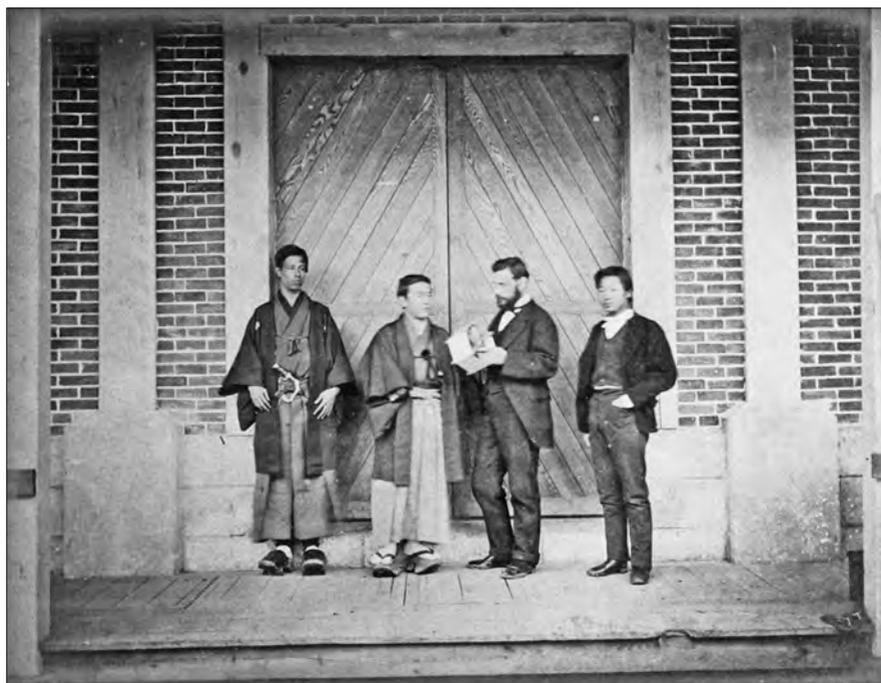
2——川島忠之助というひと

川島忠之助の伝記には、大正が昭和に^{あらた}華まるころ、忘れられた翻訳家川島忠之助を再発掘した柳田泉に「川島忠之助伝」の先駆的な仕事がある⁵⁾。晩年の忠之助からの聞書や自筆年譜を織り込んだものである。また、それを参酌しつつ肉親の見聞を交えた子息順平の「父・川島忠之助」⁶⁾がある。富田仁にも『ジュール・ヴェルヌと日本』に収められた「フランス文学翻訳事始め——川島忠之助の歩いた道」や、お雇い外国人たちとの逸事を辿ろうとした「川島忠之助について」の評伝がある⁷⁾。さらに澤護にも「明治初期におけるフランス文学の移入」⁸⁾等の考証がある。中丸宣明の「『鐘八十日間世界一周』の位置」⁹⁾の記述は、これらの収穫に材を仰いだものである。

- 5) 柳田泉「川島忠之助伝」『早稲田文学』〈明治文学号「混沌開明期の研究」〉1927.4。のち『明治文学研究』第5巻『明治初期翻訳文学の研究』春秋社、1961.9.15所収。また、『明治文化資料叢書』風間書房、1959.10.25第9巻「翻訳文学編」所収の「改題」にも略伝がみえる。なお、木村毅「明治初期虚無党文学」『改造』1926.12にも、柳田とともに晩年の忠之助を訪問した模様が記されている。
- 6) 川島順平「父・川島忠之助」早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』10号、1974.3。のち『フランス演劇とその周辺』駿河台出版社、1986.2.10所収。また、注5)『明治文化資料叢書』「附録」にも、順平の筆になる「父忠之助のこと」の小文がある。なお、川島順平には自伝『八十年間世界一周——思い出の記』私家本、1986.2.23の著があり、晩年の忠之助の横顔と子女たちの消息が記されている。
- 7) 富田仁『ジュール・ヴェルヌと日本』花林書房、1984.6.20。とりわけ「第三部フランス文学翻訳事始め——川島忠之助の歩いた道」に、その前半生が詳述されている。富田には、他に注6) 川島順平『フランス演劇とその周辺』に「川島順平先生のこと——「解説」に代えて」の小文や、横須賀製鉄所および富岡製糸場のお雇い外国人と川島忠之助との関係を調査した「川島忠之助について」（その1～その3）文教大学女子短期大学『研究紀要』1976.12～1978.12がある。
- 8) 澤護「明治初期におけるフランス文学の移入」『千葉敬愛経済大学研究論集』17/18、1980.6。
- 9) 注2)に同じ。

ところが近ごろ、忠之助の嫡孫にあたる川島瑞枝氏の『わが祖父川島忠之助の生涯』¹⁰⁾と、外孫及川益夫による『川島忠之助からの便り——明治十年代横浜正金銀行リヨン出張所にて』¹¹⁾の二書があいついで刊行された。なかでも川島瑞枝氏の書は、家蔵の膨大な書簡類の地道な整理・解読作業をもとに、あらためて川島忠之助の伝記を編もうとこころみた労作である。

川島忠之助は1853年（嘉永6）5月3日、江戸本所外手町に川島奥六知^{ともより}脩の四男五女の三男として生まれた¹²⁾。1858年（安政5）、幕府御料所（俗に代官所とも）の元締（天保・弘化年間の再々任）を勤めた父に伴われて飛騨高山に赴いたが、63年（文久3）、父を喪^{うしな}って江戸に帰った。慶応戊辰の動乱を挟んで伝習生として横須賀製鉄所（のちの海軍工廠）の「覺舎」に学び、フランス語および造船技術



『富岡製糸場構内』（東京国立博物館蔵。Image:TNM Image Archives）
右から川島忠之助、ポール・ブリューナ、渋沢栄一。

10) 川島瑞枝『わが祖父 川島忠之助の生涯』皓星社、2007.7.1。

11) 注3) に同じ。

12) これまで忠之助は三男五女の末子とされてきた。しかし、次兄成次郎（のち成至。長兄随太郎は1847年に夭折）が1866年（慶応2）4月に幕府に提出した「親類書」によれば、忠之助の下には勾吉なる弟がいた。一方、川島家過去帳によれば、忠之助の生母さわは忠之助を生んだ1853年（嘉永6）12月に急逝しているから、勾吉は異母弟のようである。なお、勾吉の生母や勾吉の事績については知るところがない。

を修得したのち、1872年（明治5）、海軍省に出仕する。ときに忠之助20歳である。

翌73年、お雇い外国人として富岡製糸場の建設と操業とに貢献したポール・ブリューナの通訳官として大蔵省管轄の富岡製糸場に出向。仏人技師と日本人たちとのあいだを周旋し、意思の疎通に努めた。74年、小野組のフランス進出計画に誘われ、富岡製糸場を退任する。しかし、直後の11月に出来した小野組破綻のあおりを受けて渡仏計画は画餅に帰し、やむなく横浜の蘭八番館の番頭となる。この間、渋沢栄一・同喜作・尾高惇忠・古河市兵衛（当時小野組番頭、のち足尾銅山主）・原善三郎（亀善）・堀越角次郎などの財界の大立者に識られた。

1876年から77年にかけて、イタリアに蚕卵紙の売り込みを企図する財界¹³⁾の尻押しを受けた冒険的実業家雨宮敬次郎¹⁴⁾らの通訳として、忠之助は蘭八番館在職のままフィラデルフィアで開催中の「独立百年記念博覧会」を視察がてら、最初の欧米渡航を経験する。その道すがら、大陸横断鉄道の売店で手に入れた英訳本『八十日間世界一周』に認められる増補部分に興味をかき立てられ、さきにパリの三井物産にいた従兄中島才吉から贈られたフランス語原本（1872刊）と照しあわせて、邦訳を思い立ったという。『八十日間世界一周』前・後編の訳業が成ったのは1878年6月および80年6月のことである。いずれも、福沢諭吉門下で、のちに「三井の四天王」として知られる朝吹英二のいた慶應義塾出版部から刊行された。ちなみに、三越の朝吹常吉は子息。フランソワーズ・サガンの翻訳者登水子は孫にあたる。忠之助のいまひとつの訳業ポール・ヴェルニエの『虚無党退治奇談』が依田学海の序を添えて公刊されるのは、忠之助がリヨンに出立したのちの82年9月のことであった。

1882年（明治15）5月、二代目堀越角次郎などの推輓^{すいばん}を受けて、この年30歳になった忠之助は正金銀行リヨン出張所に赴任し、95年（明治28）までの足かけ14年間（結婚のため88年に一時帰国）、在仏生活を送る。二代目堀越角次郎は杉村甚兵衛とならんで、モスリンの国産化に努めた人物である。また、横浜正金銀行の大株主でもあり、東京市の大土地所有者でもあった¹⁵⁾。ちなみに、日本郵船上海支店長だった父久一郎（号：禾原）の奔走で、永井荷風がリヨン支店に籍を置くのはそれから10年以上も経った1907年8月から翌年3月までのことである¹⁶⁾。だから、ふたりのあいだには交渉がない。

13) この企てについては、『渋沢栄一伝記資料』第14巻明治9年11月1日の項に「蚕卵紙輸出問題」と銘打った一連の記述がある。

14) 雨宮側の証言としては、以下の二著がある。

雨宮敬次郎著、桜内幸雄『過去六十年事蹟』東亜印刷、1907.7.12。

雨宮敬次郎述、井上泰岳記『奮闘吐血録』実業之日本社、1910.12.8。

15) 横山源之助の『明治富豪史』（1910）によれば、東京市の大土地所有者として、岩崎一族の22万1000坪を筆頭に、4万坪以上の所有者10名が挙げられている。その第9位に、4万8000坪所有として浅野長勲（旧芸州藩主、侯爵）とならんで堀越角次郎の名がみえる。

16) 永井荷風『西遊日誌抄』『文明』1917.4～10。のち各種『荷風全集』収録。

フランスから帰国したのち、約2年間のボンベイ（現：ムンバイ）支店勤務を挟んで¹⁷⁾、1912年（明治45）まで、忠之助は横浜正金銀行の常務取締役兼東京支店の支配人として順調な銀行員生活を送る¹⁸⁾。なお、60歳を迎えた12年春の常務取締役退任の背景には、銀行部内に世代交代ないしは派閥抗争があったもようである。もっとも、そうした組織改編と忠之助の処遇とのかかわりについては、いまとなつては知る由がない¹⁹⁾。ただ当人は、その後も17年（大正6）まで「伴食重役」²⁰⁾として正金銀行に名を列ねるかたわら、松方正義の懇請で大正末年（1925年3月）まで堀越事務所支配人を兼務するのである²¹⁾。松方正義は二度にわたって首相の座に就いたばかりか、初代から11代におよぶ通算7次の蔵相を務め、官有



芝区伊皿子の堀越邸。敷地約2250坪、建坪約520坪、1924年築。

工場払い下げとデフレ政策を軸に金本位制への道を拓いた反面、政商の財閥への発展と農村の窮乏による自作農の小作農への転落を促したことで知られている。

『風雪——堀越家あゆみ』によれば、堀越財閥はおりしも三代目当主が早世した上に、四代目角次郎が幼弱なこともあって、輸出入業やモスリン業界などから

- 17) ボンベイ支店長時代に高橋是清の知遇をうけたことについては、上塚司編『高橋是清自伝』千倉書房、1936.2.9に詳しい。
- 18) 常務取締役就任については「朝日新聞」1907年3月21日の記事にみえる。また『横浜正金銀行史』資料編第三巻、1976.4所収の07年度上半期（決算は07.9）から11年度下半期（同12.3）にいたる営業報告書に、頭取を筆頭に常務たちが連署しているなかに、忠之助の名を見いだすことができる。
- 19) 「読売新聞」1912.4.3に「横浜正金の更迭」の記事がみえ、『横浜正金銀行史』（同上）附録甲巻之三、1976.2.11にも4月16日付「行員淘汰ニ関シ頭取訓達」がある。
- 20) 注5)と同じ。柳田は本人からの聞書とともに、忠之助の筆になる「自記略伝」を参照しつつ注5)の伝記をものしている。その「自記略伝」（柳田書の抜粋によつた）に、忠之助は自嘲気味に「伴食取締役」「伴食重役」の語を頻用している。
- 21) 堀越善雄『風雪——堀越家あゆみ』丸文株式会社、1970.3.1。ちなみに、この人事は松方正義の六女梅子が三代目堀越角次郎に嫁いでいた縁による。別の角度からいえば、松方・堀越角次郎家との太いパイプをもつ忠之助を、横浜正金銀行側も無下には整理できなかつたのであろう。銀行に在職のまま、堀越角次郎家に出向させたわけである。そのことを裏書きするかのよう、後年の忠之助喜寿の祝宴（1929.5.15、於東京會館）にも、忠之助が没した際の「会葬者芳名録」その他（1938.7）にも、松方・堀越両家の人びとが名を列ねている。

撤退し、「不動産の賃貸並に有価証券の管理」をもっぱらにしていた。「有価証券の管理」に忠之助が便宜を図ったり、有益なアドバイスをしただろうことは推測に難くない。ちなみに、堀越角次郎家は1887年（明治20）の『日本^三豪商資産家一覧』²²⁾に100万円以上の三井・岩崎・鹿島清兵衛家²³⁾を別格として、50万円以上の資産家21家のなかに数えられている。

1903年（明治36）の『^四全国五万円^五資産家一覧』²⁴⁾にも「金六百万円」とあり、浅野総一郎、雨宮敬次郎、大倉喜八郎などの明治の紳商と肩をならべて13位にランクされている。さらに、1916年（大正5）の時事新報社『^六五拾万円^六資産家』²⁵⁾では、日本橋区通旅籠町の「貸地業」として資産800万円と見積られている。1927年（昭和2）刊『社会万般番付大集』²⁶⁾の「東京主要多額納税者番付」でも、納税額4万5259円の堀越角次郎は西の関脇に位置づけられている。柳田泉と木村毅が紳士録に川島忠之助の名前を見つけ、復権に努めたのはこのころのことである。

忠之助は1938年（昭和13）7月14日、パリ祭の当日に牛込区喜久井町46番地の自宅に没した。戒名は仁寿院殿徳誉義文忠恕居士。享年86歳。墓は青山墓地一種イ—13号にある。

忠之助の伴侶には、はじめ明治の漢学者・劇評家として名高い依田学海の次女^{ことし}琴柱^{かたこ}があった。ついで石井^{かたこ}方子^{かたこ}があり、のちに村田慶子がいた。

最初の妻琴柱は、忠之助がリヨンに赴任する82年にわずか13歳の幼妻で、彼女を迎えとるために忠之助が一時帰国した88年（明治21）には、姉久和たちによって離別されたあとであった。学海に「少しく文字あり」と評され、「琴柱が姑とも姉ともたのむべき人」と日記に記された久和と反りが合わなかったためとおぼしい²⁷⁾。忠之助が留守中の87年（明治20）5月に入籍だけはされたもの²⁸⁾、^{こうれい}伉儷^{こうれい}の交わりもせぬままに離別されたこの不憫な幼妻は、忠之助の横須賀「覺舎」時代の学友佐波一郎の姉淑と学海とのあいだに儲けられた次女である。忠之助が学海に文字を質しに通っているうちに見染めたものであろう。

22) 山本東策『日本三府五港豪商資産家一覧』博文館、1887.7。

23) 鹿島清兵衛については、別稿「東京ライフスタイル——鉄砲洲『福井家文書』に関するメモランダム・拾遺」（和光大学総合文化研究所年報『東西南北2012』2012.3.19）に触れた。参照されたい。

24) 『日本全国五万円以上資産家一覧』1903.6。

25) 時事新報社第三回調査『全国五拾万円以上資産家』1924.3.29～10.6。

26) 近藤蕉雨編『社会万般番付大集』大日本雄弁会、1927.1.15。なお、横山源之助『明治富豪史』易風社、1910にも堀越角次郎の名がみえることについても注23)の拙稿に言及した。

27) 『学海日録』1882.6.22（頭欄）、岩波書店『学海日録』第5巻、1992.5.29。『学海日録』に川島忠之助の名が最初にみえるのは1881年7月16日のことである。「横浜の人川島忠之助来る。佐波一郎これに伴へり。忠、余が第二女琴柱を娶らむとするの談ありて、余に謁す」とある。

28) 1931年11月10日発行の浦安町役場の忠之助の除籍謄本に「明治廿年五月廿六日（略）妻携帶分籍」とみえる。

方子（1869年生まれ）は元老院議官で、和歌山県知事でもあった石井忠亮・キミの次女である。88年秋に忠之助に伴われて渡仏し、足かけ8年のあいだに三女を生した。95年（明治28）春、病の革まった方子と三人の幼子連れて、忠之助は帰国の途に就く。1909年にロシアから帰国の途上ベンガル湾上で没したのは、『浮雲』で近代小説の礎を築いた二葉亭四迷である。四迷の遺骸はシンガポールで荼毘に付され、遺骨は日本に持ち帰られた。それに引きかえ方子のばあいは、折しも日清戦争の講和条約交渉のさなかにあつて不測の事態が重なり、船中で没した上に呉淞沖で水葬に付された。この顛末は「読売新聞」の「鉄腸寸断す／河島忠之助氏が惨劇」（95.5.19）に詳しい。



琴柱。

三番目の妻慶子は、方子と同じく1869年（明治2）生まれ。はやく父母を喪う。東京女子師範学校卒業後、産婆、裁縫教授の資格を取るなど苦学して栃木県上都賀郡の小学校教員となり、転じて奈良高女の教師となっていたのを、99年（明治32）、ボンベイから帰国して東京支店を立ち上げ、支配人におさまった忠之助が娶ったのである。ときに忠之助47歳、慶子は31歳であった。ただし、翌年2月9日消印の古矢某の慶子あての端書に「奈良県高等女学校内」とあるし、奈良県発行の「依頼免職務」の日付は4月12日となっている。両人の結婚生活の開始は1900年（明治33）初夏までずれ込んだ公算が大きい。現に「婚姻届（控）」には「明治参拾参年六月（日付欠——引用者）」とある。とはいうものの、四女薫子が翌年1月28日に生まれているから、ふたりの事実上の夫婦生活はもう少し早まるかも知れない。慶子は三男二女を生んだが、1918年（大正7）11月、おりから世界中に猛威を奮ったスペイン風邪に罹り、48歳で没する。忠之助65歳のときのことであった。よそ事ながら、「カチューシャの唄」で長く人びとの記憶にとどまった松井須磨子が後追い心中を図ったことで有名な島村抱月も、慶子と同じ月に、同じスペイン風邪に斃れている。



忠之助・方子。リヨンにて。

以後の20年間、仏英和女学校卒業後も病がちで終生未婚だった次女園子に、忠

之助は^{かしず}傳かれることになる。ちなみに「読売新聞」(29.1.10) 婦人欄の「十年の奇病から蘇つたをんな今浦島／薄幸の身を歌道に精進する川島園子さん」の記事が美貌を窺わせる写真とともに、忠之助を介護するかたわら窪田空穂のもとで短歌に^{いそ}勤しむ園子の消息を伝えている。元号が大正はおるか昭和に革まっても、社会的名士でありつづけていた川島忠之助家の深窓に^{かくま}匿われた才媛、というあつかいである。

忠之助と方子、慶子とのあいだには三男五女が生まれた。方子の腹からは里子・園子・民子。慶子とのあいだに蔦子・順平・慎平・貞子・欣平が生まれた。なかにあって、里子は1895年9月、母のあとを追うかのように夭折した。また、前掲の川島瑞枝氏は嫡男順平の長女にあたる。順平はフランス留学ののち東京宝塚劇場文芸部に席を置き、「笑の王国」を主宰したコメディアン古川ロッパのために佐々木邦原作の『ガラマサどん』の脚色を手がけ、戦後に早稲田大学仏文科教授となった²⁹⁾。

川島忠之助は幕府瓦解の内乱期に、幕臣の縁辺に列なる者の一員として少年時代を送る。明治になってからは、禄を離れて貧窮に^{あえ}喘ぐ多くの親類縁者たちを抱えながら³⁰⁾、いち早く新知識としての語学を武器に、日本の主要輸出品であった生糸生産の現場や、その輸出入業務に立ち合う。さらにはヨーロッパの絹織物業の最前線リヨンで、ロンドン支店などとも緊密な連携を保ちながら、14年間の長きにわたって為替業務に携わった。忠之助が帰国のやむなきにいたったのは、妻子の病のためである。それを証するかのように、帰国後も正金銀行東京支店の支配人の要職をこなし、その職を退くのは明治も終わる年のことであった。

忠之助はその後も引きつづき横浜正金銀行の重役として、さらには堀越事務所の支配人として業務に携わるかたわら、一身の蓄財にもぬかりなく励んでいる。鉄道株を中心とする優良株の運用³¹⁾はお手の物だったはずである。それとは別に、

29) 忠之助の嗣子順平の経歴や家族の消息については、注6) に掲げた『八十年間世界一周——思い出の記』に詳しい。

30) 忠之助が五人の姉たちに、明治も末年にいたるまで、月々応分の援助をつづけていたことは、5節に掲げる慶子の「家計簿」にもみてとることができる。

31) 「川島忠之助家文書」のなかには、堀越角次郎家から川島家あてに発行された月々の出入金、各種株券の払込金や売買を書き上げた差引書、渡金証合計8点(1887、91、92、92、94年分)が残されている。そのなかに、リヨン駐在中の忠之助から姉久和あてに87年度700円、91年度900円、92年度900円、94年度2300円(93年度分もしくは95年度分を含むか)が横浜正金銀行経由で送金された旨の記載がみえる。こうしたことから窺うに、リヨン駐在中の忠之助に代わって、この時期、資産管理に携わったのは留守宅を守る姉久和だったもようである。久和は堀越から渡される資金を正金銀行株の買い増しに当てているのはもちろん、おりからもっとも伸張著しかった山陽鉄道をはじめ、九州・両毛・関西・炭鉱(雨宮敬次郎の北海道炭礦?) 鉄道などの鉄道会社株の購入に励んでいる。なお、こうした動きは忠之助の指示に従ったものか、堀越の助言によるものか、それとも久和自身の才覚によるものかはつまびらかでない。

本郷区丸山福山町の宅地588.67坪、貸家13棟26軒（1933年現在、以下同じ）³²⁾をはじめとして、北豊島郡西巢鴨村池袋の宅地750坪、貸家2棟2軒。同石神井村谷原の宅地320坪、畑地4反1畝29歩、貸家5棟8軒。千葉県東葛飾郡浦安村猫実^{ねこざね}の宅地523坪。同長生郡一宮村城ノ内の宅地213坪、畑2畝13歩、原野1反6畝、貸家1棟。静岡県足柄下郡吉浜村蓬ヶ平の山林畑地合計3反5畝13歩と、つぎつぎに地所や家作を取得し、資産形成に余念がない。また、関東大震災の翌年1924年からは、本郷区丸山福山町の地所や貸家群はそのままに、堤清次郎の箱根土地株式会社が分譲した牛込区喜久井町の「旧坊城子爵邸」（近世期には津和野藩亀井家藩邸）の一部（宅地256坪、自宅2棟、貸家1棟2軒）を購入し、生活の拠点を遷している³³⁾。

念のために断っておけば、この転宅は関東大震災の罹災によるものではない。順平が1924年（大正13）に高等学院を経て早大仏文科に進学したのを契機にしたものと推測される。順平・慎平のふたりの息子に買い与えた邸内に（順平の土地135坪に隣接して、慎平分の121坪があった）掛り人の園子とともに身を寄せることで、忠之助は老後の身を養おうと図ったのだろう。この年、忠之助は古稀を2年も過ぎていたからである。だが、順平は早大卒業後の1927年（昭和2）から32年までフランスに留学したから、その留守宅が園子に介護された忠之助の終の棲家になったというのが実情に近かろう。なお丸山福山町20番地の旧宅は、この年9月に三井物産の藤森達夫と結婚した五女貞子が引きつづき守ったようである。

そうした忠之助に、天もまた齢を藉すにやぶさかではなかった。戦時体制の強まる30年代末までの大正・昭和戦前期に、忠之助は悠々とその余生を愉しんだのである。

そういっても、忠之助は一身の安逸ばかりを偷んだわけではない。

32) 以下の地所・家作の記載はいずれも「川島家資産調その他」（1933.8.1現在）によって記述した。購入当初は山林や畑地であったものが1933年時点には宅地に地目変更されていたりしたものや、のちに道路敷として東京市に買い上げられたり、逆に忠之助が隣接地を買い増したりしたものもすべて33年時点の記述に従った。なお、「川島家資産調その他」は忠之助の依頼に沿って、堀越事務所によって調査の上、書き上げられたものと考えられる。その成立の経緯については6節に詳述する。

33) 箱根土地（株）による「旧坊城子爵邸牛込喜久井町土地分譲」の広告が「朝日新聞」25.3.11や「読売新聞」3.12に幾度となく躍っている。一方、堀越事務所の封筒に封入されていた「川島家資産調」（1933年現在）の喜久井町の項を参照すれば、順平・慎平名義の地所256坪はともに「右喜久井町ノ宅地ハ大正十参年十一月十四日箱根土地株式会社ヨリ買約」とみえる。ちなみに、買取価格はあわせて3万3930円余とある。さらに『東京市牛込区地籍台帳』内山模型製図社、1932.3.1にも喜久井町46番地（230坪余）に順平・慎平の名が、その隣接地戸山町35番地および38番地（あわせて27坪）に順平の名がみえる。内実は、喜久井町に属する230坪余の地所は来迎寺の所有地で、戸山町にまたがる片々たる地所（山林、畑地27坪）だけが「旧坊城子爵邸」の一部だったのである。堤の商売の仕方は「羊頭狗肉」というべきだろう。なお、そのことは三井乙蔵『東京区分職業土地便覧牛込区支部』大日本都市調査会、1915.10.13.によっても確認できる。

かつてわたくしは「銃後の日露戦争——『穂積歌子日記』を読む」³⁴⁾という小論をものしたことがある。穂積歌子は洪沢栄一の長女に生まれ、東京帝国大学法学部長兼貴族院議員、枢密院議長等を歴任した明治法学界の重鎮穂積陳重に嫁した女性である。日露戦争下の歌子の日記からあぶり出されるのは、戦勝を祈念するナショナリズムの熱狂である。

それと拮抗して、出征兵士やその留守家族を思いやる情愛の濃やかさもまた色濃く発露しているのであった。非常呼集されて牛込区弘方町の穂積邸の庭に駐屯し、^{しちやう}輜重の遅れから飢えと寒さに震える出征兵士を手厚くもてなしたばかりでなく、日本赤十字社の幹部として留守家族の慰問を精力的にこなす歌子の姿には、貴顕夫人の noblesse oblige（貴人の義務＝慈善活動）と名づけてしかるべきものが横溢していた。

一方、川島家には賞勲局総裁名で忠之助にあてた「褒状」（1928.11.2）が残されている。震災善後会に1000円の寄附をしたためである。昭和初年の1000円といえば、生半可な金額ではない。相応にゆたかな家庭の年間収入にも匹敵する金額である。もちろん、この多額の寄附金は社会的名士に課せられた半ば強制的な寄附行為とも見做しうる。一概に忠之助の篤志に出たものとばかりは言いがたい側面があるということである。有名税、といっても差しつかえなからう。

ところが、ここに2通の書簡が残されている³⁵⁾。ひとつは1891年（明治24）10月28日におきた濃尾震災のうちに、時事新報社気付で10円の義捐金を寄附した旨の書簡（91.11.26）である。いまひとつは93年（明治26）10月27日、高山町長あてに「小生事、幼少ノ頃亡父奥六ニ從ヒ貴地ニ在留致候事凡七年、其後未タ一回モ足ヲ貴地ノ境界ニ入ル、ノ歡ヲ得ズ」（読点・ルビとも——引用者）と断りながらも、飛驒地方をあいっついで見舞った早魁・洪水被害への義捐金10円（父の菩提寺大雄寺にも布施物10円）を贈った手紙である。

このころ、忠之助はフランスはリヨンの地に身を置いている。だから、濃尾・飛驒地方を襲った天災報道は風の便りにも似ていただろう。その上、それらの地域との縁は書状にもいうように、幼少年期を過したという以上には出ない。だから、震災や風水害のニュースを見て見ぬふりをしたところで、頼かぶりというにはあたらぬ。にもかかわらず、遠くりヨンの地から救恤義捐金を寄せる忠之助に、フランス流に言えば noblesse oblige の精神の発露を、本邦古来からの語句を藉りていえば「有徳人の善行」を認めないわけには行かないのである。

ちなみに、忠之助のこの種の義挙は枚挙にいとまがない。川島家文書のなかには、日露戦争下の1904年（明治37）に妻慶子を促して、赤十字社や愛国婦人会に

34) 拙稿「銃後の日露戦争——『穂積歌子日記』を読む」和光大学総合文化研究所年報『東西南北2007』2007.3.15。なお『穂積歌子日記』については、穂積重行編『穂積歌子日記』みすず書房、1989.12.15に拠った。

35) 2通の書簡はいずれも、神奈川県立博物館に寄贈されたものなから引用した。

寄附させた証跡が数多く残されている。忠之助自身もまた、インド飢饉（「朝日新聞」98.2.6）、台湾地震（同06.5.18）などの義捐金活動に進んで名を列ねているのであった。

幕末・維新期の動乱^{から}を辛くもくぐり抜け、「天ハ自ラ助クルモノヲ助クト云ヘル諺ハ、確然^{シカトタメシココロミ}経験シタル格言ナリ、（略）自ラ助クル人民多ケレバ、ソノ邦国、必ズ元氣充実シ、精神強盛ナル事ナリ」という中村正直の『西国立志編 原名自助論』³⁶⁾のアジテーションを身をもって体現し、その稔りを刈り取ることできた明治の快男児の一典型がここにはいる。

3 — 「川島忠之助家文書」とのめぐりあい

ところで、川島忠之助の事績に興味を惹かれたのは、つぎのような経緯からである。

2009年夏以来、わたくしどもは和光大学総合文化研究所の活動の一環として「東京一市民の暮らしと文化」と銘うって、明治このかた東京都中央区湊一丁目（俚俗：鉄砲洲本湊町、旧：東京市京橋区本湊町）に三代にわたって住み慣わし、貸地・貸家業を営んできた『福井家文書』の整理に当たっている。その意は、関東大震災と戦災というふたつの災禍に遭遇したり、潜りぬけてきたりした都市中間層の暮らし向きと生活文化の全貌を浮き彫りにしたいというモチベーションに発している。貸地・貸家経営を中心とした2000点ちかくの史料の整理を推し進めるかたわら、和光大学総合文化研究所年報『東西南北2011』および『同2012』に、整理の途上で得られた知見を少しずつおおよけにしてきた³⁷⁾。

その成果を共同研究員の鈴木努氏が川島瑞枝氏に送ったのである。鈴木氏には瑞枝氏が『わが祖父 川島忠之助の生涯』³⁸⁾を上梓するにあたって資料の翻刻をお手伝いした、かねてからの因縁があったからである。それに応えた瑞枝氏の懇篤な礼状を、筆者も読ませてもらった。そして、そこに記されたつぎのような件をみて、奇貨居くべしと思ったのである。

祖父川島忠之助は、銀行（東京支店長時代）につとめておりました折、本郷

36) 中村正直『西国立志編 原名自助論』1871.4「第一編 邦国及ビ人民ノ自ラ助クルコトヲ論ズ」。

37) 拙稿「江戸の地霊・東京の地縁——鉄砲洲『福井家文書』に関するメモランダム」。長尾洋子「昭和戦前期におけるレジャーのかたち——福井家とレジャー革命」（以上、和光大学総合文化研究所年報『東西南北2011』2011.3.18）。拙稿「東京ライフスタイル——鉄砲洲『福井家文書』に関するメモランダム・拾遺」。鈴木努「家を貸し、町を成す——『福井家文書』から東京を知る」。荒垣恒明「東京から郊外をめざす——『成城』から読み直す開発の歴史」（以上、和光大学総合文化研究所年報『東西南北2012』2012.3.19）

38) 注10) に同じ。

丸山福山町に住んで、家族もそこから高等師範に通学しておりました。父もその一人でございます。先日、古い大正・明治時代の箱を開けましたところ、家作に関する書類が沢山出て参りました。祖父は、自宅の周辺に貸家を沢山持っていて、それを親戚の者にまかせているらしく、その人の手で、家賃の入りやら、修繕の見積り（大工さんの）やら、色々ございました。その他、千葉県、浦安（今のディズニーランド辺り？）にあった貸家やら、石神井の小作人に貸していた土地台帳やらもございます。きっと銀行をやめても収入を、ということで、土地を買ったのだと思います。

福井家の貸地・貸家経営はそれを専業とするプロフェッショナルの仕事である。本拠地は京橋区にあり、所有する地所や家作もおおむね京橋区や日本橋区の下町地域に集中している。それに引きかえ、川島忠之助の本業はあくまでも銀行家であった。瑞枝氏もいうように、不動産の取得と経営とは銀行引退後の資産保全もしくは資産運用の色合いが濃い。それを裏書きするかのよう、忠之助が地所の取得に本格的に乗り出すのは、正金銀行の常務取締役を解任された1912年（明治45）4月以降のことである。池袋や上総一宮の地所は、このとき手に入れられている³⁹⁾。

その上、それらの貸地・貸家群は、横浜正金銀行東京支店の支配人におさまった明治30年代はじめから25年間にわたって自身も住んできた本郷区丸山福山町という山の手地域を拠点に、関東大震災後に移り住んだ牛込区喜久井町、さらには北豊島郡西巢鴨村池袋、同石神井村谷原など、「都の西北」の遠い郊外地に展開している。震災を契機に、都市〈東京〉が新宿や渋谷を越えた〈西〉の私鉄沿線に湧出したことはよく知られている。しかし同じ時期に、むしろ震災にさき立つかたちで都市〈東京〉は西北方面にも大きく伸張する気配をみせていた。池袋―飯能間を結んだ武蔵野鉄道の鉄道免許の取得（1911.10）や開業（1915.4）と、忠之助の池袋や石神井の地所入手とは、インサイダー取引とまではいわないにしても、微妙にリンクしているように見受けられる。ちなみに福井久信もまた、1919年（大正8）に戸山町に進出し、西大久保にも土地を取得している。

あるいは、福井家が東横沿線の綱島に別宅を構えたのと同じように、川島家は上総一宮や湯河原の東隣静岡県下足柄郡吉浜にも宏大な土地を取得している。1928年6月に入手された吉浜のばあい、病がちの次女園子をはじめとする家族

39) 池袋の地所については、注10)の川島瑞枝書の附録「川島忠之助飛騨からの手紙」に収録されている「池袋地面所有主金子ヲ急ク由」（1912.4.18）のくだりによって、入手の時期・経緯を辿ることができる。常務退任を機にセンチメンタル・ジャーニーと洒落込んでいた忠之助の飛騨旅行中に、留守宅を守る慶子によって400円の手付金が支払われている（同4.29）からである。ちなみに、注32)に挙げた「川島家資産調」の池袋二丁目の項にも「明治四十五年五月（中略）買入」の注記がみえる。上総一宮の地所についても、5章に述べる同年の慶子の「家計簿」によって入手の経緯の一斑を窺うことができる。

の健康を慮ったためであろうか。それとも丹那トンネル開通（1934）以前、小田原—熱海間を結んだ豆相人車鉄道・熱海鉄道・大日本軌道と、一貫してその経営に携わってきた雨宮敬次郎の人脈に負うところがあったのだろうか。もっとも、忠之助が欧米視察の斡旋をした雨宮当人（1911没）は疾うに泉下の客となっていた。しかし、雨宮との深いつながりが吉浜の土地買収ひいては土地投機に一役買っていたであろうことは考えられて良い。

このようにみえてくると、福井家文書は関東大震災の震災被害、その後に帝都復興事業の一環として推し進められた区画整理事業、東京市が5郡隣接82町村を合併して〈大東京〉に発展したこと（1932.10.1）に伴う事業拡大、太平洋戦争下に断行された建物強制疎開および空襲被害、さらには戦後の過重な財産税の賦課などにかかわる史料を主としている。その反面、震災以前については、日露戦争前後の土地集約に辛うじて辿りつけるばかりである。

それに引きかえ、川島忠之助のばあいは幕末・維新期の内乱を潜りぬけているから、明治初年以降の都市東京の変貌の機微にまで遡ることができそうである。現に、浦安村猫実（瑞枝氏のいう今のディズニーランドあたり）の田地の安堵をめぐる名主・請人・組頭連署の「譲り渡し申田地証文之事」（1869.6）の文書などが残されている。ちなみに、文書のあとに名にもみられるように、この地所は次兄成次（治）郎成至が亡父川島奥六知脩から受け継いだものである。しかしいつのころからか、一族の「家父長」の役割を実質的に担いつづけてきた忠之助の手に渡



猫実の土地証文（1869 明治2己6月）

っている⁴⁰。こうしたことから窺われるように、川島忠之助家は関東大震災にも、戦災被害にも遭わないで現在にまで至っている。長年にわたって東京に住いながらも、稀有な例と言えよう。

誤解を生まないように付け加えておけば、猫実の地は1917年9月30日の台風による大津波の被害を蒙っている。また、順平夫婦の代々木上原への転居後も貸地・貸家として経営されていた牛込区喜久井町の家作は、東京大空襲のおりに罹災している。関東大震災にも、戦災被害にも遭わないでと述べたのは、川島忠之助家本家と、そこに収蔵されてきた文書類に限っての話である。逆にいえば、太平洋戦争下に断行された建物強制疎開や空襲被害、さらには戦後の過重な財産税の賦課などにかかわる史料については、福井家文書と同様に大量に収蔵されていて、これまた実態を解明することができそうである。

あるいは、つぎのような相違点も指摘できる。福井家は都市中間層に属する階層であった。川島忠之助家は明治の成功者として、もう一ランク上の富裕層に属していた。こうした格差がもたらす「地所観念」のあいだにはどのような違いがあるのか。もっともこの問題意識は、明治以降に生じた階層差に限らなくともいいかも知れない。長く拝領地に住むことを慣いとしてきた士分と、沽券地を一所懸命の地として守らざるをえなかった商家、という両家の出自の違いまでも分析のコンテンツに含めた上で、近代都市〈東京〉における土地所有の意味を考えることもできるからである。福井家文書の性格を側面から照射し、引きくらべるのに、川島忠之助家文書ほど恰好な史料はないようである。

そういっても、川島忠之助家文書は池袋や石神井の土地取得に垣間見られるように、それ自体、明治・大正・昭和期を通じた、都市〈東京〉における土地集約の恰好なサンプルの形状を呈している。単なる比較材料にはとどまらない、魅惑的な史料群なのである。

そこで、慎重深い鈴木氏を半ば強引に語らい、2012年5月8日に渋谷区代々木上原の川島瑞枝氏邸を訪れた。瑞枝氏はわたくしどもの不躰な訪問^{ぶしつけ}を歓迎してくださったばかりか、奥六知脩関係文書は岐阜県高山資料館に、横浜正金銀行関係の文書は神奈川県立博物館⁴¹に寄贈されたあとだったが、それでも数次にわたって、祖父忠之助・父順平氏の代に蓄積された膨大な史料群のうちから、主として忠之助の伝記および地所・家作にかかわる数多くの文書を選び出し、こころよく貸与くださったのである。

ここに述べる報告は、一に川島瑞枝氏のこうした恩沢によるのである。

40) 成至が没したのは1904年(明治37)5月のことである。その息廣太郎も05年にあいついで没している。猫実の土地が忠之助の手に渡ったのはその前後のことかと思われる。

41) 神奈川県立博物館への寄贈文書については、寺寄弘康に以下のふたつの論考がある。「横浜正金銀行創立当初の職制と行員について」『神奈川県立博物館研究報告〈人文科学〉』37号、2011.3。「川島忠之助資料から見た明治期の横浜正金銀行」『平成20～23年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告集』2012.3。

4—— 女たちの記録—— その1. 須美子の「予定表」と「惣菜購入簿」

川島忠之助の妻慶子と順平の妻須美子とは、それぞれに家計簿を残している。

ふたりの家計簿の類をここに取り上げるのは、川島忠之助を「家父長」に戴くこの一家の生活を裏支えしてきた経済基盤と、そこから立ち現れる生活文化の一端を垣間見たいからである。家計簿をつけるという行為自体に、婦人之友社を主宰した羽仁もと子を引き合いに出すまでもなく、女性たちの教養や家庭婦人としての意識の高さを汲みとることもできる。しかし、それらの点についてはここでは触れない。

須美子の史料は、ひとつは新婚間もない1936年（昭和11）1月から37年1月までの「予定表」である。いまひとつは1943年（昭和18）から翌年にわたる「惣菜購入簿」である。どちらもB6判の市販の出納帳にペン書きで記されている。なお、前者には当人の筆蹟で「予定表」と表書きされている。それに対して、後者にはタイトルがない。項目をチェックしてみると、米・味噌・醤油などの費目が含まれていない。そこで、ひとまず「惣菜購入簿」と仮題しておいた。

慶子の方は、ひとつは掌大（A7変形判）のメモ帳に手ずから罫線を施し、鉛筆書きの細字で認められた家計簿2冊である。道歌や教訓めいた格言が走り書きされた箇所もある。しかし、おおむねは明治40年代の「家計簿」のようである。おおむねはと言い、ようであると曖昧な物言いをせざるを得ないのは、鉛筆書きの文字がかすれて読みがたい上に、ひところは子どもたちの手遊びの具になったものか、いたるところに落書が施され、あるいは乱暴に引きちぎられたりもしている。そのせいで、年間を通じて判読可能なのは1912年（明治45）度分だけだからである。

それとは別に、四六判のノート2冊（それぞれ36丁、32丁）が残されている。どちらにも、1918年（大正7）11月にスペイン風邪で没した慶子の最晩年にあたる17年6月以降の日付がみえる。日付の下に、自宅で催したレセプションに供した前菜、スープからはじまってデザート、コーヒーにいたるフランス料理のメニューとレシピとを克明に記録したノートである。瑞枝氏の著書にも紹介されているから、就いて見られたい。

ただ、瑞枝氏はそれらの調理に慶子みずから携わった上に、家族に供したように受けとめられている。しかし、帝国ホテルや築地・上野の両精養軒などのコックの出張料理による晩餐会を主婦の慶子を取り仕切った記録、と受けとめた方が得心しやすいようである⁴²⁾。17年6月は忠之助が「伴食重役」を辞し、正金銀

42) 注6) に掲げた「父・川島忠之助」に「宮内省の大膳寮に勤めたというコック長の人を、週一度招いたとみえる。

行から正式に身を退いたときにあたる。だから、長年恩顧を蒙った人びとを数次に分かって自宅に招き、内輪の園遊会を催したと考えても不自然ではない。それほど、これらのレシピ集は本格的なものである⁴³⁾。

1936年(昭和11)度の須美子の「予定表」から吟味したい。

34年5月に結婚したばかりのふたりは、この年順平33歳、須美子22歳の若夫婦で、7月には第一子瑞枝が生まれる。青山学院出身で、YWCAを卒業したのち、シティバンクでタイピストとして働いた経験もある須美子は、震災後の1924年(大正13)に神田今川橋から銀座三丁目の第一徴兵保険ビルに進出し、昭和モダニズム文化をリードした松屋百貨店の創業主古屋徳兵衛の一族である。父古屋大吉(26年に早逝するまで専務)、兄富一郎(43~66年に専務・常務)はいずれも、松屋の要職を占めていた⁴⁴⁾。また、母千代の里方木村家は秋田の大地主で、東大独文科の木村謹治、伝染病研究所の木村雄吉の兄弟を出している。

ふたりの住いは、漱石生誕の地として名高い夏目坂沿いの来迎寺の北隣にあった牛込区喜久井町46番地の父の邸(名義は順平。隣接して弟慎平の邸があった)で、同居人(とはいっても、別世帯)は忠之助と姉園子および使用人たちである。他の兄弟姉妹たちは任地に赴いたり、他家に嫁いだりしている。なお、6節にあらためて述べることになるが、大患を煩ったのちの1933年(昭和8)8月に、忠之助は7人の子どもたちにそれぞれ財産分与を済ませていた。

「予定表」に見られる収入は、夫順平のサラリー76円と、堀越事務所から月々給される250円の合計326円である。年収4000円弱という計算になる。なお、堀越事務所作成の「川島家資産調その他」(1933.8.1現在)にも、慎平に月ごとに支給された180円とならんで、「毎月 順平 250円」の記載を見いだすことができる。

ここで、谷崎潤一郎の『細雪』⁴⁵⁾に描かれた三女雪子の最初の見合い相手瀬越をめぐる次姉幸子と末妹妙子とのやりとりを参照してほしい。物語の現時は須美子の「予定表」が綴られた



須美子

43) 注10)に同じ。同書には1917年6月16日の例が掲げられている。なお、ほぼ同時期・同一階層に属する永井荷風の母恆の「料理メモ」が『「永井荷風と東京」展』(江戸東京博物館、1999.7)の展示資料として公開された。慶子のレシピ集は品目・調理法双方にわたって、はるかにそれを凌駕している。

44) 『松屋百年史』1969.11.3。

45) 谷崎潤一郎『細雪』上巻(一)「中央公論」1943.1。のち、各種『谷崎潤一郎全集』収録。

のと同じ1936年である。

「井谷さんが持つて来やはつた話やねんけどな、——」

「さう、——」

「サラリーマンやねん、MB化学工業会社の社員やて。——」

「なんぼぐらゐもろてるのん」

「月給が百七十八円、ボーナス入れて二百五十円ぐらゐになるねん」(略)

「その人、仏蘭西語出来はるのん」

「ふん、大阪外語の仏語科出て、巴里にもちよつとぐらゐ行てはつたことあるねん。会社の外に夜学校の仏蘭西語の教師してはつて、その月給が百円ぐらゐあつて、両方で三百五十円はあるのやて」

「財産は」

「財産云うては別にないねん。田舎に母親が一人あつて、その人が住んでる昔の家屋敷と、自分が住んでる六甲の家と土地とがあるだけ。——六甲のんは年賦で買った小さな文化住宅やさうな。まあ知れたもんやわ」

「それでも家賃助かるよつてに、四百円以上の暮し出来るわな」

ことのついでに記しておけば、雪子の二番目の見合い相手、東京帝大卒で兵庫県農林課で水産技師をしている野村は「高等官三等で、年俸三千六百円程度、外に賞与が若干とあるから、月に割ると三百五十円前後になる」という。

大阪上本町の「御大家」に生まれ、芦屋の有閑マダムに納まっている幸子をはじめとする蒔岡家の姉妹たちが自分たちの位地と釣り合う家柄、学歴、教養などのもろもろの条件がここには論^{あげつら}われている。とりわけ、収入への関心があけすけに吐露されている。

順平の家柄、学歴、教養は、瀬越と同じくフランス帰りということもあって、古屋家の人びとはおろか、蒔岡家の姉妹たちの眼鏡にもおおむね叶うものだったと言えよう。その上、弟慎平は帝大卒業後、父のあとを襲って横浜正金銀行に入行。犬養内閣の外相を務めた芳澤謙吉(妻は犬養木堂の長女操)の三女元子^{めと}を娶っている。姉妹の配偶者たちも地方の素封家の出であるとともに、それぞれ相応の大学を卒業して、古河鉱業や三井物産に勤めている。姻戚関係にも申し分はなかったのである。

それに引きかえ、ふたりの結婚話が持ち上がったころ、順平は5年にわたるフランス留学から帰国後も足かけ2年ばかり、これといった定職にもつかず、六代目尾上菊五郎の日本俳優学校の講師をしたり、吉江喬松(孤雁)監修の『モリエール全集』(中央公論社)編纂の手伝いをするなど、ぶらぶらしていた。結婚後の34年8月になってようやく、阪急や宝塚歌劇団の社長だった小林一三のお声がかかりで、東京宝塚劇場の文芸部に潜り込んだのである。父忠之助のコネクションで

ある⁴⁶⁾。だから、36年の年初には入社後わずかに1年半なのであった。瀬越の「月給が百七十八円」にくらべて、33歳にもなってサラリー76円と著しく遜色があるのは、そこらへんの事情を反映している。『細雪』でいえば、順平の境涯は瀬越や野村よりも、子爵の庶子で、長く欧米生活を送り、帰国後も道楽半分に建築設計の真似事をしている御牧の経歴に似通っていると言えよう。

現にこの縁談には、花嫁側が二の足を踏んだ。色よい返事を寄越さぬ古屋家を恨んで、通りすがりに松屋百貨店の建物を睨みつけたという証言がみえるのは順平の回想録『八十年間世界一周——思い出の記』である⁴⁷⁾。だが、娘のしあわせを願う古屋家の親兄弟としては、それも無理からぬことだったのである。

こうしたなかにあって、順平の足らずがちの収入を補ってあまりあるのは、堀越事務所から月々支給される250円の金利なのであった。多額の株券や少なからぬ家作の運用を堀越事務所に委託し、そこから上がる金利によって生活費の過半を賄ってゆく。永井荷風の生活上の理想、ひいては第一次世界大戦前のフランス小市民のそれを、元金には手をつけず、利子の効力によって賄われる「ランティエ rentier (金利生活者)」にみたのは石川淳の『敗荷落日』である⁴⁸⁾。荷風伝説を打ち砕く激越な追悼文として名高いこのエッセイは「株式取引所で、毎週わずかな売買をして」「精神の自由に関するもっと粗雑さの少ない感情」を追い求めるヴァレリーのテスト氏⁴⁹⁾を念頭に置くことで、荷風文学の本質を鋭く射抜いている。

それはともかく、問題にしたいのは日仏の国情の違いを越えて、大正・昭和戦前期の日本の富裕層を支えた「ランティエの幸運なる生活」なるものが、順平・須美子の新婚生活の基盤を成していることである。忠之助の「積善の余慶」がふたりの新婚生活を潤しているということでもある。一介のサラリーマン瀬越との違いがここにはある。

念のために断っておけば、順平の足らずがちの収入、とはさきに述べた。また、一介のサラリーマン、とはたったいま指摘したばかりである。しかし、順平の不足がちの収入というのは時岡家の姉妹たちの何不自由ない贅沢な暮らしとくらべれば、ということである。あるいは、高学歴を身につけて新しく登場してきたサラリーマンたちもまた、「新中間層」として時代の脚光を浴びていたエリートだったことを忘れてはなるまい⁵⁰⁾。当時の一般市民の生活水準からすれば、「四百円以上の暮し」とは日々のくらしに^{あくせく}齟齬する必要のない、潤沢な家計の謂いにほかならない。

46) 注6)に同じ。

47) 注6)に同じ。

48) 石川淳『敗荷落日』『新潮』1959.7。のち、『夷斎遊戯』に収められ、各種『石川淳全集』収録。

49) 粟津則雄訳『テスト氏未完の物語』現代思潮社、1976.3.31。

50) 竹内洋『日本の近代12学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社、1999.4.25。

同『増補版立身出世主義』世界思想社、2005.3.31。

支出については「予定表」からめぼしい費目を拾い、その平均値を掲げてみる [表1]。

何より注目されるのは、若夫婦の小遣いそのまま、東宝からもらう順平のサラリー額に相当していることである。ピアノや絵のレッスン料 (順平のバリ時代からの友人で、島崎藤村の次男鶏二への経済援助) も、和書・洋書の購入代金も、ふたりの小遣いの内には含まれていない。煙草銭を含めた教養・娯楽費は、堀越事務所から月々支給される250円によって賄われている。そして、教養・娯楽費に支弁されている151円 (「順平小遣い」から「酒・コーヒー代」までの合算) という金額と家計に占める比重の大きさ (逆にいえばエンゲル係数の低さ) とに、昭和戦前期の富裕層のゆとりあるくらし向きが端的に現れている。

表1 須美子の「予定表」(1936.1~37.1)

順平小遣い	50円
須美子小遣い	25円
須美子ピアノ	15円
島崎鶏二氏画塾	10円
洋書代	10円
書籍代	5円
煙草代	6円
酒・コーヒー代	30円
食費	40~50円
被服・洗濯代	10円
電気・ガス・水道	25円
ラジオ・新聞代	5円
家屋修繕費 (植木手入れ代)	10円
保険料	10円
女中 (育児のため+1名)	10~18円
瑞枝預金 (誕生後)	15円
夏期・年末予備費 (避暑等)	30円
計	306~324円

須美子の1943年度分の「惣菜購入簿」は、忠之助の没後5年を経ている。住いは渋谷区代々木上原 (1939年暮れ転居。敷地180坪、建坪50坪) に遷されている。五島慶太が扱った目黒蒲田電鉄田園都市部 (旧田園都市株式会社、のち東急不動産) が開発した尾州徳川家跡地の分譲地である。また、おりしも太平洋戦争のまっただなかなので、非常時の影が色濃く落ちている。日本人全般の食習慣も食品の流通システムも大きくさま変わりした現在となつては、出納の特徴は容易には推し量りがたい。ただ際立って顕著なのは、年間の「ハム」代金が優に260円を超過していることである。それにソーセージ、レバー、バター代を加えると、総額300円にも及ぶ。

1938年4月に公布された国家総動員法をきっかけに生活必需品が配給制となり、41年4月以降、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸の六大都市で米穀の配給通帳制と、外食券制が実施されたことはよく知られている。現に須美子の「惣菜購入簿」にも、1月5日から7日にかけて「ハム10匁37銭」「ハム20匁74銭」「ハム40匁1円46銭」の記述が立て続けに現れる。いずれも配給品であった。なお、10匁は37.5グラムにあたる。

しかしこの3日間を境に、配給品としてのハムは姿を消す。つぎに記述が認められるのは2月も23日になってからである。「ハム12円70銭」とある。以後も月

一度の割合で、12円前後から40円(12.21)の相場で購入されている。さきの37銭とくらべて、この桁違いの金額から推し測るに、2月以降のハムの入手は須美子の実家筋にあたる銀座・浅草両松屋や、軽井沢(7月26日に小諸、8月9日に軽井沢の記事があるから、この年も避暑に出かけたものとみえる)、館林⁵¹⁾、ひいては母千代の里方の秋田などの縁故を頼った買い出しや闇ルートの商品とおぼしい。毎日の食費が平均1円50銭から2円内外で推移している標準家庭とくらべてみても、あるいは5年前の「予定表」にみられる「食費」500~600円を参照してみても、ハム代金年額260円の出費は法外なものである。この年の川島順平家の惣菜費の総額は1000円の大台に載っている。

時代の水準をはるかに超えた、豊かな食卓の光景がここにはみえる。ベーコンといえば鯨のベーコン、ソーセージといえば魚肉ソーセージといった、戦後も1950年代半ばになってようやく普及してきた食糧事情から逆算してみても、一般市民とは懸け離れた生活ぶりが見てとれるのである。

主立った外食費は資生堂パーラーをはじめとする年4回、60円の支出である。そのうち、6月29日の北京亭での食事は順平の「お誕生祝」なのであった。渋谷道玄坂にあった北京亭は、谷崎の『細雪』にも「東京では聞えてゐる店」とみえる⁵²⁾。代々木上原の自宅からほど近い新開の街渋谷道玄坂にあって、相応の店だったものとおぼしい。

それはともかく、資生堂パーラーといい、誕生日パーティといい、あるいは軽井沢で味わわれるアイスクリームや日ごろの嗜好品のコーヒーといい、同年の福井階子の「出納簿」⁵³⁾には到底見いだすことのできない食習慣であり、品目であり、金額なのであった。ここにもモダンライフの残照が顕著に現れている。

この家族は戦時下という時代の制約を強く受けながらも、相対的には贅沢というほかない日常生活を営んでいる。こうした生活習慣が忠之助伝来のものなのか。あるいは5年に及ぶフランス留学を体験した順平の意向を汲んだものなのか。それとも昭和初年代に都市(東京)の尖端的なモダンライフの洗礼を受けた須美子の少女時代に由来するものなのかは、いまにわかには断じがたい。ただ確実に言えることは、時代のなかではきわめて潤沢な川島順平家の生活水準が、月々堀越事務所から支給される「利息の威光」、ことばを換えて言えば川島忠之助の「積善の余慶」としての「ランティエの幸運なる生活」に由来するという一事である。

51) 兄古屋富一郎の妻は群馬館林の素封家千金楽(ちぎら)家の出。「惣菜購入簿」に4月15日「館林にて」、11月15日に「10円館林に預け」などの文字がみえる。

52) 注45)に同じ。『細雪』中巻(十五。)

53) 福井階子もまた、1943年1月から45年5月におよぶ「出納簿」(「福井家文書」F②2~3)を記している。もっともこの出納簿は、家賃・敷金の出入りも、火災保険料の支払いも、日々の賄料もひとまとめにした大福帳とも呼ぶべき性格のものである。さらに、賄料は一括して記述されているばかりが多く、個別の品目は拾いがたい。そうではあるけれども、43年度中に拾い出すことができるのはアイスクリーム2件、バター1件で、ハム・ソーセージ等の記述はない。

5 — 女たちの記録 — その2. 慶子の「家計簿」(付) 御大喪のことども

偶然とはいえ、慶子の「家計簿」はそれが記録された時代のさまざまな世相を反映していて、すこぶる興味深い。

「家計簿」がつけられた1912年(明治45)といえば、あたかも明治天皇崩御の年であった。日記ではないから、天皇崩御についての記載はない。そうではあるが、7月25日から一家を挙げて上総一宮に避暑に出かけていた家族のうちから、31日に順平、慎平のふたりが急遽帰宅している。2円50銭の汽車賃が支出されていることから、そのことは知られる。天皇の死をめぐって「いゝ人らしかつたがお気の毒であつた」との感想を漏したのは志賀直哉である⁵⁴。一方、川島家の子どもたちは東京高等師範学校附属小学校に在籍していた。だから、志賀のようなのんきな感想を抱くだけではすまず、崩御を悼む学校行事に狩り出されたものらしい。

10月8日には「二円 ルボン氏寄贈品代」の記事がみえる。ジョルジュ・ルボンはフランス陸軍顧問団の一員として、1872年(明治5)から76年にかけて小石川砲兵工廠(現:東京ドーム一円)の創業に力を尽した砲兵大尉である。のち故国に帰って累進し、陸軍中將になっていた。明治天皇の御大喪にあたり、イギリスのコンノート殿下などのヨーロッパの王族と肩をならべ、フランス大統領の名代として御大喪に参列したのである。シベリア鉄道、安奉線経由で下関に入った9月8日から、10月9日に日本を離れるまでの滞在であった。山縣有朋・大山巖両元帥をはじめとする陸軍の将星はもとより、朝野を挙げての熱烈な歓迎を受けたことは新聞各紙の報道によって知られる。9月13日の御大喪に、さらには9月18日に行われた旧知の乃木希典の葬儀に参列している⁵⁵。ただ川島家に限っていえば、割り当てられた金二円也の「寄贈品代」に御座なりに名を列ねているばかりである。「フランス通」ではあっても海軍畑で、しかもはやく実業界に転身した忠之助とルボン將軍とのかかわりは思いのほかに薄かったのかも知れない。それはともかく、ここに



慶子

54) 志賀直哉日記 1912.7.30の項に「七月三十日 火(略) 前日天子様が亡くなられたといふ事を其朝聞く。いゝ人らしかつたがお気の毒であつた」とみえる。

55) ジョルジュ・ルボンの経歴と特派大使としての再来日については、澤護「ジョルジュ・ルボン:日本の兵器製造の技術指導者」『敬愛大学研究論集35』1989に詳しい。

も御大喪の余波がかすかな痕跡をとどめている。

それとは別に、9月12日に慶子は1円50銭を「下女」に下げ渡している。特別給付の理由は「二重橋、青山見物に付き」とある。天皇の病の篤くなった7月下旬ごろから、東京市民たちは二重橋前に参集し、30日の崩御以降は濠を隔てて殯宮（もがりの宮）を遙拝した。また、二重橋から青山の葬場殿（現：明治神宮）にかけて、天皇の柩を載せた輻車の通行する沿道が日ましに整備された。深夜の御大喪に備えた春日燈籠や大提灯が設営されたのをはじめとして、木綿をかけた柵や幡、黒白の鯨幕で電信柱などの近代的都市景観が隠蔽され、荘厳された。そうしたためざましい葬送風景を見物しようと、13日の御大葬にさきだって、多くの見物人が詰めかけたのである。

川島家の使用人たちもまた、出入りの御用聞きなどの噂話に浮き足立っていたものらしい。そこで、主婦慶子の気働きで、12日に女中たちを見物に出してやったのである。さきの1円50銭は、電車賃や当座の小遣いというわけである。ここにも御大喪の余波が窺われる。ちなみに、このころ川島家には彦と呼ばれるお抱え俵夫のほか、2歳になったばかりの末子欣平の乳母とみとみよのふたりの女中がいた。彦の給金は25円。とみは10円、みよは8円であった。なお、茨城県那珂郡出身のとみは上総一宮の避暑を機会に出替りして、秋以降はすえに交替した。すえの給金は5円である。また前年の1911年末には彦に現金5円と8円70銭のハッピーを、とみとみよのそれぞれに6円および3円85銭の「歳暮」の品を与えている。「お仕着せ」である。9月12日は、とみに代わって奉公に上がったばかりのすえの東京見物を兼ねていたのだろう。

ところで、実際に輻車に扈随して青山に行ったもののひとりに森鷗外がいる⁵⁶⁾。その帰途、鷗外は乃木希典・静子夫妻の殉死のニュースを耳にし、すぐさま『興津弥五右衛門の遺書』の筆を執った⁵⁷⁾。漱石の『こゝろ』と並んで、御大喪および乃木將軍の殉死への直接的な反応だったことはだれでも知っている。

御大葬とは別に、1912年（明治45）は川島家にとって、事の多い年であった。ひとつには、忠之助が常務取締役を免ぜられて、「伴食」重役に貶黜されたことである。忠之助は日を置かず、4月下旬から5月上旬にかけて、かつて「小生事、幼少ノ頃亡父奥六ニ従ヒ貴地ニ在留致候事凡七年、其後未ター一回モ足ヲ貴地ノ境界ニ入ル、ノ歡ヲ得ズ」と嘆いた飛驒高山にセンチメンタル・ジャーニーに出向いている。そして、大量の土産物を親戚、故旧、上司たちに配っている。永年の恩誼に報いる志に出たものであろう。夏には7月下旬から8月いっぱい一家を挙

56) 森鷗外日記1912.9.13の項。『鷗外全集』第35巻、岩波書店、1975.1.22。「十三日。晴。輻車に扈随して宮城から青山に至る。午後八時宮城を発し、十一時青山に至る。翌日二時青山を出でて帰る。途上乃木希典夫妻の死を説くものあり。予半信半疑す。」

57) 『中央公論』1912.10。のち、各種『鷗外全集』収録。

げて上総一宮に、初冬には湯河原に静養に出かけている。

それとともに、閑散の身となった忠之助は東京倶楽部、日本橋倶楽部、同方会、日印協会などの各種のクラブ⁵⁸⁾に頻繁に出入りする。また、帝劇（11年3月開業）、歌舞伎座（11年11月改修）、浅草国技館（12年2月開業）、第六回文展⁵⁹⁾、拓殖博覧会（12.10.1～11.29、於上野公園）などの見物にも赴いている。あるいは、日本橋区通一丁目にあった漢籍専門店の青木崇山堂から大量の漢籍を取り寄せている。恩師にあたる劇作家の池田大伍から「日本人で『太平御覧』を通読したのは藤原道長とあなたのお父さん位でしょう」と評されたというエピソードを順平が紹介しているが、『太平御覧』や『資治通鑑』もその一端だったのだろう⁶⁰⁾。

このついでに触れておけば、東京女子師範学校出身の慶子はフレーベル館から教育玩具や書籍を購っているばかりでなく、フレーベル館主催の「童楽会」にも参加している⁶¹⁾。また『衛生雑誌』や『婦女新聞』も定期購読している。『婦女新聞』（1900.5～1942.2）は新聞とは名乗りながらも、女子教育や女子労働、家庭生活、さらには公娼廃止、母性保護など、女性にかかわる種々の問題を扱った週刊誌であった。『婦女新聞』を主宰した福島四郎の『古今の婦人』購入の記事もみえる。また、園子、民子の年長の娘たちは月ごとに国書刊行会および国民文庫の配本を取り寄せている。

その一方で、常務取締役退任に伴って、忠之助が地所の取得に乗り出したことは3節に述べた。池袋や上総一宮の土地はこのとき手に入れられたものである。池袋の地所750坪余の手付金400円の支払いは、飛驒に旅行中の忠之助に代わって、4月29日に慶子の手を煩わせている⁶²⁾。

いまひとつの大きなできごとは、三女の民子が古河鋳業の佐竹房夫と華燭の典を挙げたことである。披露宴は下谷同朋町の伊予紋（川島家側の負担は42円42銭）で行われた。それにさきだって結婚準備が進められた。日本橋三越をはじめ、黒江屋（通一丁目、漆器、購入額36円）、^{はいばら}榛原（同上、料紙・目録、同10.65円）、糸り円（銀座四丁目、呉服・半襟、同14円）、稲葉辰（竹川町、美容、節季払い）などの老舗

58) 「東京倶楽部」は井上馨の発起によって1884年設立。「日本橋倶楽部」は1890年設立。「同方会」は会長に榎本武揚を戴いて1896年に設立された旧幕臣の倶楽部である。なお、倶楽部の誕生を論じたものに橋爪紳也『倶楽部と日本人』学芸出版社、1989.3.25がある。

59) この文展は第六回で、夏目漱石『文展と芸術』（「朝日新聞」1912.10.5～28、のち各種『漱石全集』収録）にいろいろな風評のために「非常の混雑」との評がある。忠之助もまた、それら群衆の一員だったのである。

60) 注6)に掲げた『父・川島忠之助』に同じ。

61) 1月20日の項に「フレーベル館」（07年、高市次郎創業）、2月25日に2円を納めて「フレーベル会童楽会」に参加したとの記事がみえる。東京女子師範出身で、多くの幼子を抱えていた慶子が、幼児教育の祖フリードリッヒ・フレーベルに強い関心を抱いていたことはあらためて断るまでもない。なお、園子をはじめとする子どもたちの健康を慮ってか、慶子は『衛生雑誌』を定期購読（月77銭）している。

62) 注39)に同じ。

で調べた買物の記述が目白押しに並んでいる⁶³⁾。

生母方子から受け継いだ病のために長女里子が夭折したばかりか、次女園子が長い闘病生活を余儀なくされたことは2節に言い及んだ。園子は橋本節斎の小石川病院に入退院をくりかえしている。さらには季節の変わり目ごとに、2歳になったばかりの末子欣平をはじめ、順平や慎平などが代わるがわる内科・耳鼻咽喉科・歯科医の世話になっている。往診の医師のお供をする俵夫たちへの心付だけでも、相当な額にのぼっている。付け加えておけば、この年はリヨン、ボンベイ赴任中の留守宅を守ってくれた姉久和の十三回忌辰（1898年3月没）に当たる年でもあった。神奈川県久良岐郡戸部村（現：横浜市西区戸部町）の願成寺への付届が散見されるのはそのためである。

それやこれやで、この年、慶子の手を経た収支の概算を記せば、おおよそ6500円にものぼっている。このうち約1000円が本郷丸山福山町の屋敷内にあった貸家の家賃収入であった。残りの5500円については、家計簿には「請取」と記されているばかりである。だから、それが横浜正金銀行のサラリーおよび役員報酬なのか。それとも、兼任先の堀越事務所からの報酬なのか。保有する有価証券の配当金なのか。はたまた、多額の出費に伴う株券の売却や預貯金の取り崩しを含んでいたのか。その実態はまるで見当がつかない⁶⁴⁾。

それとは別に忠之助のポケットから直接支出された金銭についても、推測するほかはない。それというのも、常務取締役を退任した4月に忠之助は早速、飛騨高山にセンチメンタル・ジャーニーと洒落込んだことはくりかえし述べた。その旅費や亡父の菩提寺大雄寺への祠堂金その他の支出が、慶子の「家計簿」には計上されていないからである。秋には湯河原に湯治に出かけたもようだが、その経費のあつかいも同様である。

また、さきに挙げた『穂積歌子日記』をちょっと覗いただけでも、夫の陳重は築地・上野の両精養軒、帝国ホテルをはじめとして、常磐屋や星ヶ丘茶寮、亀清、八百松、植半、偕楽園、紅葉館などの東京一円の名だたる料亭の宴席に、連夜のように連なっている⁶⁵⁾。実業の最前線に臨んでいた忠之助もまた、種々の取引に

63) これらの店は、いずれも松本順吉『東京名物志』公益社、1901.9.27にみえる。このうち「糸り円」については、永井荷風の『腕くらべ』（『文明』1916.8～17.10。のち各種『荷風全集』収録）の「ぼたる草」の章に、芸者駒代の長襦袢を描いて「此の土地（新橋花柳界——引用者）なれば定めし襟えんが自慢の品減法に高さうなもの」とある。

64) 1898年1月26日付松村保一あて書簡に所得税申請のための報知として「1800 Salary 1000 Bonus」の文字がみえる。また、正金銀行の退職者組織の「正友会」の記録によれば、1907年3月9日に常務取締役に当選した忠之助が行員を退いた際の退職金は2万3925円とみえる。翌10日に、忠之助は常務取締役に選任されている。有価証券の配当等を除く忠之助の所得は、いまのところ、この二つの数字以外には見いだせていない。

65) 注63)と同様、これらの料理屋はいずれも松本順吉『東京名物志』公益社、1901.9.27にみえる。

まつわって同じような生活を送っていたものと推察される。とりわけ常務取締役退任に伴った各方面への挨拶まわりもあったはずだから、そうした社交の席への出入りも一段と頻度を増していたと考えるのが順当だろう。しかし、それらの出費も慶子の記載からは漏れている。

そういえば、忠之助は「斗酒なお辞せず」といった強酒^{つうしゆ}ぶりで知られていた。リヨンやボンベイ駐在中も手蔓を求めて故国から大量の酒を送らせ、舌鼓を打っている⁶⁶。また、晩年にいたるまで「昼に四合、晩に五合」といった鯨飲ぶりで、「29円70銭 桜正宗一樽」といった風に、川島家の台所に樽ごと持ち込まれる酒代は、慶子の家計簿にもしばしば片鱗^{かたうら}を留めている。

それに引きかえ、忠之助が音曲^{おんきょく}を嫌ったことは可笑しいほどであった。これもボンベイ駐在中のことだが、琴をはじめた園子はどうか、三味線も習いたいとむずかっただらう。それに対して、88年10月25日の留守宅あての書簡に「三味線ト踊ハ如何ナルコトアリテモ決シテ無用ニ御座候」とあるばかりか、追っかけて11月16日付書簡でも「偕園日課ノ内長唄ト三味線ヲ引キ又ハ三味線ニ合セ唄候事ナレバ如何程本人望候トモ父ニ於テ不承知ナル旨御申聞ケ被下即日相止メ候様御取計下サルベシ」(ルビ——引用者)と強い口調で指示している。こうした三味線ぎらいが何に由来するののかは定かでない。だが、宴席で満を引くことはあっても、忠之助が座敷を取り持つ芸妓を近づけることは稀だったのであろう。

ところで、民子の結婚に際して当人や女親でなければ行き届かない皿小鉢や履物、半襟など、身のまわりのこまごまとした買物については前述したとおりである。だが、箆笥・長持・呉服類をはじめとする嫁入り道具や、「化粧料」という名の持参金の記述がない点にも留意する必要がある。これまた、家長の忠之助のポケットから出されたのであろう。そうとでも考えなければ、甥の中島広太郎をはじめとする親戚知人などの贈主と品名を書き上げた8丁にもわたる「御祝品(控)」に対する内祝の費用(忠之助の筆蹟で、合計496円の心づもりが書き入れられている)の出どころがない。忠之助夫婦にとっては初めての、とりわけ慶子にとっては「生さぬ仲^な」である娘の輿入れだったから、多額の出費は覚悟の前であつたらう。

ちなみに、柳川春葉の同題の家庭小説がベストセラーになったのはこの年のことであつた⁶⁷。あるいは、いまでは物語としての活力^とを疾うに失った「継子いじめ」をテーマのひとつとしてミリオンセラーになった徳富蘆花の『不如帰』⁶⁸の川島武夫のモデルと見做された三島弥太郎は正金銀行の頭取(のち日銀総裁)で、忠之助の上司であつた。三島弥太郎は東北諸県の「鬼県令」として自由民権運動

66) 注35)に同じ。リヨン駐在中の1891年6月26日には「正宗惣衣」60壺を、ボンベイ駐在中の88年5月6日には「菊正宗福娘」5ダースを、6月9日にも「福娘」6ダースを入手している。

67) 柳川春葉『生さぬ仲』「大阪毎日新聞」1912.8.17~13.4.24。

68) 徳富蘆花『不如帰』「国民新聞」1898.11.29~99.5.24。

の弾圧に辣腕を揮い、のちに警視總監を勤めた三島通庸の子息である。こうした因縁からも、社会的体面の上からも、なおさら気をつかい、費用もかけたはずである。

これらを要するに、この年の川島忠之助家の出費は6500円プラス α 、総額にして優に1万円を超えたであろうことは推測に難くない。

ところで、明治末年における6500円前後、マキシマムに見積って1万円を超える家計収支がどのぐらいのランクに位置したのかを目測するために、傍証をふたつだけ挙げておく。

石川啄木の『ROMAZI NIKKI』(1909.4~6)⁶⁹⁾によれば、東京朝日新聞社の校正係を勤めていた啄木の月給はわずかに25円であった。しかも、貧しさゆえの浪費衝動に取り憑かれた啄木は前借りにつづく前借りで、ともすれば日々の煙草銭にも事欠くありさまであった。その一方で、12年4月16日付書簡には「二十五円といふ基本さへあれば、家族が(東京に——引用者)来てもどうかかうか暮せる」。それがそうできないのは「家を持つ金、旅費、それから下宿屋に納得させる金」など、家族同居のための当座の工面がつかないばかりだと述懐している⁷⁰⁾。老母や妻子と同居するために啄木が望んだ300円プラス α の年収は、まことにささやかな額であった。それというのも、この金額はさきに挙げた川島家のお抱え俵夫の給金と同額な上に、忠之助の嗜んだ「桜正宗一樽」の金額にも及ばなかったからである。

夏目漱石が1895年(明治28)、松山中学に月俸80円という、校長をも凌ぐ破格のサラリーで赴任したことはだれしも小耳に挟んだことがあるだろう。その後、五高教授を経てイギリスに留学。帰朝後に着任した一高教授(年俸700円)兼帝国大学講師(同800円)の職を棒に振って、1907年(明治40)に鳴物入りで朝日新聞に入社したことも、これまた多くの人びとに知られている。朝日入社の際の漱石の待遇は月俸200円プラス年2回の賞与なのであった⁷¹⁾。

三者のあいだには微妙なタイム・ラグと恒常的なインフレが伏在している。そうではあるけれども、啄木の年収300円から漱石の3000円前後に対するに、忠之助の年額6500円プラス α という出費に耐えうる経済力をあらためて念頭に置いてほしいものである。

そしてこうした裕福な生活は、柳田泉が伝えているように、多くの親類縁者のために節を屈して銀行業務に精励^{かつきん}格闘した成果だったのである。あるいはヨーロッパ視察中の『経国美談』や『浮城物語』で有名な矢野龍溪と意気投合しながらも、郵便報知新聞社への魅惑的な入社誘いを謝絶するのと引きかえに得られた

69) 石川啄木『ROMAZI NIKKI』1909.5.1の項など。『石川啄木全集』第6巻、筑摩書房、1967.12.25。

70) 宮崎大一郎あて書簡。『石川啄木全集』第7巻、1968.4.26。

71) 荒正人『漱石研究年表』集英社『漱石文学全集』別巻、1974.10.20。

稔りなのであった⁷²⁾。これまで折に触れて述べてきた「積善の余慶」とは、銀行帳簿の蔭で孜々として営まれてきた川島忠之助の「麵麴問題」のために支払われた労苦の見返りの謂いなのであった。

6 — 本郷丸山福山町の貸家を読む

長男順平が5年に及ぶフランス留学から帰国した1932年（昭和7）夏、避暑先の上総一宮の別宅で、忠之助は胃潰瘍からくる大量の吐血と下血をみた。「修善寺の大患」ならぬ「一宮の大患」である。一時は生死のほども危ぶまれた忠之助がようやく喜久井町の自宅に戻ることができたのは、10月の声を聞いてからであった⁷³⁾。忠之助80歳の年のことである。

死期の遠からぬことを悟った忠之助は、旦那寺の専修山講安寺に狩野友汀の山水画を奉納（1933.4）する。それとは別に、祠堂金500円（同6.4）を納めている。講安寺は東大病院から無縁坂を東に下った、岩崎邸（現：日岩崎邸庭園）の高い石垣と坂道を隔てた北側の湯島切通片町にあった。鷗外の『雁』のヒロインお玉さんが住んでいた町、といった方が早わかりするかも知れない。また、15世住職の池田立基は内田百閒と同じく陸軍士官学校のフランス語教官だったから、忠之助とはまんざら縁がないわけではなかった。

「一宮の大患」をきっかけに、33年（昭和8）夏、忠之助は堀越事務所（日本橋区大伝馬町1-1-1）に依頼して、保有する資産の調査を行わせた。堀越事務所の封筒に一括して保存されていた「川島家資産調その他」（1933.8.1現在、全9葉）がそれに当たる。地所・家作・有価証券をあわせて、総額38万7677円余と見積られている。それとあわせて、慎平（百分比20）・欣平（同16）・園子（同13）・蔦子（同11）の持ち分も定められた〔表2〕。なお、一覧表に嫡男順平の名がないのは「主人」忠之助分（40%）がそのまま順平に遺贈されるからだし、民子・貞子の名を欠いているのは興入れの際の持参金として分与済みだったからであろう。

堀越事務所の試算に先立って、麹町区内山下町にあった日本不動産株式会社にも、別途、丸山福山町の土地・建物の評価を依頼している。1932年10月15日付「土地建物評価書」がその報告書である。第三者機関の評価を参照するためとおぼしい。日付に留意すれば、上総一宮から生還した直後に、この拳に出たことが読みとれる。ちなみに、評価額は6万9459円余（堀越事務所の試算は8万2993円余）とある。

72) 注5) に同じ。柳田は忠之助の「自記略伝」から「心頭ニ往来スル所ハ三幼児ノ外ニモ扶養中ノ眷属ヲ如何ニ処置スベキヤノ麵麴問題ニ外ナラザリキ」と「麵麴ノ為ニ一生ヲ銀行ニ捧ルコトニナリシ運命ノ奇シキニハ今ニ至リテモ猶低回禁シ得サル所ナリ」の二文を引用している。なお、矢野龍溪とのエピソードも同文中に見える。

73) 注6) に掲げた『八十年間世界一周——思い出の記』に詳しい。

時を同じうして、日本不動産によって牛込区喜久井町をはじめとするその他の地所・家作の査定が行われたか否かについては関連史料を見いだせていないので、目下のところは何とも言えない。ただ、1938年（昭和13）7月に忠之助が没して、家督相続や遺産分与が実施された際の「土地台帳謄本写」などの書類を勘案するに、1934年1月に分家した蔦子のために目黒区三田の宅地93.84坪、家屋20坪（計1万3500円）が追加購入されているほかには、さしたる異同がない。だから、前掲の「川島家資産調」に預金残高（詳細不明）を加えた額が、忠之助が築いた資産のおおよそを伝えていると見做して差しつかえなからう。

それとは別に、堀越事務所の封筒の内には「収入調」（33年8月1日現在）なるものも含まれていた。それによると、33年1月から7月末までの地代・家賃および預金・有価証券の利息・配当金などの合計額は2万832円余。そこから諸税・地所家屋諸掛・火災保険料を差し引いた純収入は1万5403円余とみえる。右の金額は7ヶ月分だから、単純に試算してみても33年度の忠之助家の月収は約2200円、年収は2万6400円という見当になる。順平や慎平のサラリーがこの限りでないことは断るまでもなからう。4・5節に述べた「女たちの記録」を裏支える経済基盤がここには仄見えるのであった。

忠之助が本郷区丸山福山町の地所・家作をはじめとして、牛込区喜久井町、北豊島郡西巢鴨村池袋、同石神井村谷原、千葉県東葛飾郡浦安村猫実、同長生郡一宮村城ノ内、静岡県足柄下郡吉浜村蓬ヶ平に不動産を取得し、資産形成をしてきたことは、これまでも折に触れて述べてきた。ここでは、忠之助が大正末年まで生活の拠点とした本郷区丸山福山町の地所・家作に限って、若干の考察を加えておきたい。

1899年（明治32）4月、約1年半のボンベイ支店勤務を終えた川島忠之助は、同年6月から日本橋区本両替町1番地に横浜正金銀行東京支店を立ち上げ、支配人におさまった。各種新聞広告には支店の所在地を「日本銀行向角」としている。現在の中央区日本橋本石町1丁目、貨幣博物館の場所にあたる。同時に、忠之助は本郷区丸山福山町の地所を入手している。47歳になって、ようやく東京に腰を落ち着けることになったのである。翌1900年初夏には、村田慶子とあらたな家庭を築くことになる。

それまでの忠之助の居所をおおまかに辿っておく。忠之助は63年（文久3）に父を喪って飛騨高山から江戸に帰った。兄成至の手になる「親類書」には深川安宅御船蔵のうしろの大縄組屋敷80坪を拝領しているものの、本所石原弁天小路に借地・借家しているとあるから、ひとまずはそこに落ち着いたものと思われる。あるいは、猫実の地に戻ったのかも知れない。その後、横須賀製鉄所の「餐舎」、製糸場の富岡、蘭八番館や正金銀行に勤めていたころは横浜相生町と、諸所を転々とする。さらに14年間をリヨンに過し、帰国後は東京芝公園内、横浜太田初音町

表2 川島家資産調〈昭和8年8月1日現在〉

項目	摘要	内訳	注意事項	坪当り評価額	評価額総額
総計					387677.60
主人(忠之助)小計					153166.10
丸山福山町	宅地	588.67坪		80	47093.60
	貸家3棟	185.91坪		70	13100.00
	貸家8棟	208.12坪		80	16800.00
	貸家2棟	70.75坪		85	6000.00
喜久井町	宅地	135.20坪		100	13520.00
	住宅	58.215坪	(二筆合計256.31坪)	146	8500.00
	倉庫	10.00坪		180	1800.00
	物置	2.27坪		80	200.00
菊実	土地	523.00坪		15	7875.00
	一ノ宮	778坪			4000.00
石神井☆	宅地	320.30坪	☆総額¥7951.50を三等分 (忠之助・欣平・慎平)	5	2650.50
	畑	4反1畝29歩			
吉浜※	土地	266.00坪	※主人・慎平・欣平・園子分合計 1064.00坪	5	1330.00
	有価証券				
					30297.00
慎平小計					80758.75
喜久井町	宅地	121.11坪	(二筆合計256.31坪)	100	12111.00
	住宅	48.152坪		140	6500.00
	貸家	37.75坪		80	3000.00
	池袋▽	宅地	750.06坪	▽総額¥56254.50を二分(慎平・欣平)	75
石神井☆					(2650.50)
吉浜※	土地	266.00坪	※主人・慎平・欣平・園子分合計 1064.00坪	5	1330.00
	有価証券				
					27040.00
欣平小計					62747.75
池袋▽	土地		▽慎平と共有	80	(28127.25)
	貸家	44.50坪			
石神井☆					(2650.50)
吉浜※	土地	266.00坪	※主人・慎平・欣平・園子分合計 1064.00坪	5	1330.00
	有価証券				
					27040.00
園子小計					52805.00
吉浜※	土地	266.00坪	※主人・慎平・欣平・園子分合計 1064.00坪	5	1330.00
	有価証券(社債・公債含む)				
					51480.00
篤子小計					38200.00
	有価証券(社債・公債含む)		利息・配当金合計 ¥1686.10		

注：▽※☆は共有

昭和8年収入	収入合計		20832.25
		諸税	2142.14
		地所家屋諸掛	2800.00
		火災保険料	486.95
		純収入	15403.16

出所：堀越事務所作成の資産表(川島家所蔵)をもとに作表

と居を移す。かてて加えて、その後ボンベイにも単身赴任する。横浜正金銀行東京支店の支配人になるまでの忠之助は、三界に家もないありさまなのであった。

ちなみに、1895年に妻子を伴って帰国し、再度ボンベイに赴任しているあいだは、姉久和とふたりの遺児は横浜市太田初音町山手（現：横浜市中区）に仮寓していた。ことは「是迄東京芝公園内に仮住し罷在候処此度横浜太田初音町山手へ引移候」という転居通知（「朝日新聞」95.9.25～27）によって、あるいは留守宅を守っていた姉久和が98年（明治31）3月に熱海伊豆山の相模屋で没した際の死亡広告に「横浜太田初音町山手自宅出棺」（同上、98.3.29）とあることによって裏づけられる。久和没後の一年間、園子と民子が横浜弁天通4丁目で、中村重次郎・ユウ（忠之助や久和の姉）の娘留子に撫育されながら小学校や幼稚園に通っていたことは、忠之助と留子の書簡のやりとりから知られる。

ところで、『学海日録』の98年5月10日の記事に、義弟佐波一郎からの伝聞として、忠之助はこのところ妾を蓄えているが、この妾が良からぬ者なので、「餐舎」時代の学友若山鉉吉がその由をボンベイ駐在の忠之助に伝えようとしているとみえる。「妾」というのはおそらく学海の誤聞であろう。娘琴柱への仕打ちに恨みを飲んでいた学海としては、忠之助の閨門の乱れにいささか溜飲の下がる思いをしたとしても無理からぬところである。だがここにいう「妾」は、上記の留子のことであった。忠之助と留子とのあいだに金銭上のトラブルが絶えなかった様子が、種々の文書から窺われるからである。

こうした転居や海外赴任の果てに、99年6月2日、忠之助は本郷区丸山福山町にはじめて家屋敷を購入した。8月1日には園子、民子ともども、同地に寄留（本籍は猫実）している。ただし、この地所を購入するに到った機縁や経緯については何も分からない。入手された地所は丸山福山町13-1（224.64坪）、18-2（34.56坪、内崖地3.32坪）、19（92.45坪）、20（96.66坪）である。さらに、翌年3月17日に21-2（23.10坪）を、09年1月31日には21-1（117.26坪）を買い増している。総計588.67坪である⁷⁴。地番からすると13番地は飛び地のように見える。だが、その実、大きな「段差」を挟んで、他の地番と同一区画を形成していることは追々述べる。なお、自宅は20番地に置いていた。

忠之助が居を定めた本郷区丸山福山町という町はどのような町であったのか。一高（現：東大農学部）正門から本郷通りを渡って西に進めば、駒込西片町の閑静な住宅街に入る。福山藩主阿部侯の中屋敷の跡地6万2000坪である。明治になってからは、阿部家家臣団のリードによる住宅地開発が功を奏して、一高・帝大教授をはじめとする人びとが多く住む「学者町」になっていた⁷⁵。漱石の『三

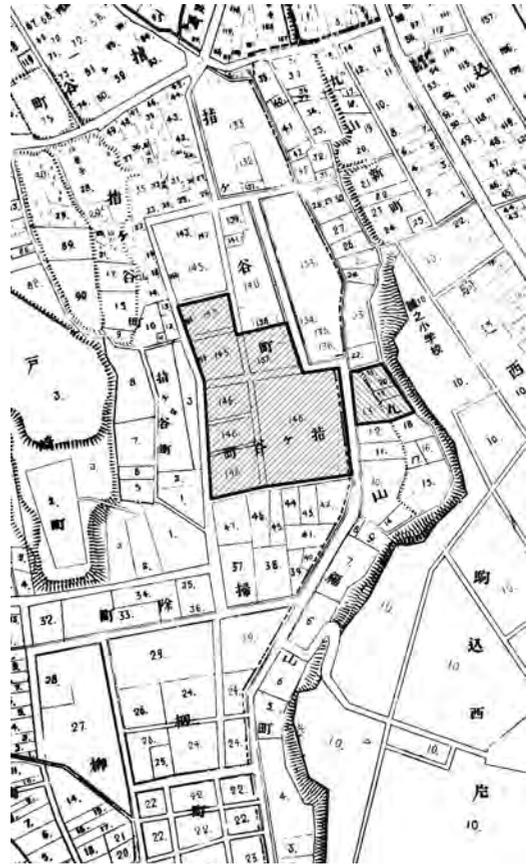
74) 『東京市拾五区及接続郡部地籍地区並びに地籍台帳——本郷区』1912.4.25によっても、忠之助の地所を確認することができる。

四郎』に登場する広田先生の引越し先「への三号」の所在する町である。町の南端には旧藩主の阿部伯爵邸があり、北には藩校の名に由来する誠之小学校が位置している。

西片町一帯は本郷台地の西のはずれを占めている。この町を境に、西側は標高差10メートルを優に越す崖地になる。崖地の裾野に沿って、本郷台地をマフラーのように取り巻きながら南北に伸びる町が丸山福山町である。崖の下端はなお西に向かって傾斜をつづけ、北から小石川区指ヶ谷町、掃除町、柳町、春日町などの谷間の町々に接している。永井荷風の『日和下駄』「崖」の章に、谷底から本郷台地を見上げて「小石川春日町から柳町指ヶ谷町へかけての低地から、本郷の高台を見る処々には、電車の開通しない以前、即ち東京市の地勢と風景とがまだ今日ほどに破壊されない頃には、樹や草の生茂つた崖が現れてゐた」とあるゆえんである⁷⁵⁾。

この記述につづけて、荷風は本郷台地の東側にあたる千駄木の高地と根津の低地とに説き及んで「こゝも亦絶壁である」(傍点——引用者)という。振り返って言えば、西片町と丸山福山町の境界も「亦」、「絶壁」の語が似つかわしい地形なのであった。地図に描き込まれた岩崖記号に意を注げば、そのことはたちどころに納得される。そして、川島忠之助家の地所は誠之小学校のちょうど崖下にあたる角地面にある。

川島瑞枝氏は『わが祖父 川島忠之助の生涯』を書くためにこの地にフィール



本郷区丸山福山町界限地図
 〰〰〰 が忠之助の屋敷
 〰〰〰 が小石川指ヶ谷町の指定地

75) 山口廣編『郊外住宅地の系譜』鹿島出版会、1987.11.30所収の稲葉佳子「阿部様の造った学者町……西片町」参照。

76) 永井荷風『日和下駄——一名東京散策記』『三田文学』1914.8~1915.6、のち各種全集収録。

ドワークをこころみ、「崖下の『鰻の寝床』という表現がびったりの、くねくねと曲がる細い道路」に「納得がいかなかった」と述懐されている⁷⁷⁾。崖下や細い路地という町自体のたたずまいもさることながら、瑞枝氏にとって何よりも心外だったのは、ひと昔前にはこの地が「道路から階段のある急な坂道。当時、石の階段を下りた突き当たり一帯は朝から三味線が聞こえるような三業地」に接していたことなのである。現に、1912年(明治45)6月、小石川指ヶ谷町137、144～146番地(総計7481坪)は三業地の指定を受けている⁷⁸⁾。瑞枝氏がいうように、川島忠之助家のあった本郷区丸山福山町20番地と白山三業地とは指呼の間にあっただのである。

ただ忠之助の名誉のために断っておけば、瑞枝氏の目に留まった「階段のある急な坂道」というのが、ことからの機微を解く鍵なのである。あるいは、さきに指摘しておいた屋敷内の13番地と18～21番地の境界をなす大きな「段差」という地形に立ちどまる必要がある。地図に目を凝らせば、川島家の屋敷地の真ん中を貫いて、ここにも岩崖の支線が走っているのを辛うじて認めることができる。現に、18-2の34.56坪の内には崖地3.32坪を含んでいたとある。

東京という都市にあっては、土地の高低差が貧富や貴賤を峻別する例がしばしばある。そのことは赤坂離宮(現:迎賓館)に隣接して、下谷万年町・芝新網町とならんで明治の三大貧民窟のひとつだった四谷鮫ヶ橋のスラムがあったことを思い起せば、だれしも得心するだろう⁷⁹⁾。そして本稿でもさきに、崖地の裾野に沿って、本郷台地をマフラーのように取り巻きながら南北に伸びる町が丸山福山町である、と述べておいた。そこで指摘した「裾野」の語こそが肝要なのである。本郷台地の高台(西片町)・裾野(丸山福山町)・谷底(指ヶ谷町など)はそのまま、社会的階層差をあらわす地勢＝地政学なのであった。念のために東京興信所の調査を参照すれば、丸山福山町は「西片町西端の崖下にて概ね閑静なる上、中

77) 注10) に同じ。

78) 白山三業地について述べたものに、以下の2著がある。

島田豊三『白山繁昌記』白山三業株式会社、1932.12.25。

浪江洋二『白山三業沿革史——白山創立五十周年記念』雄山閣、1961.6.20。

なお、白山三業地が指定地になる以前の八軒矢場を描いたものに樋口一葉の『にぎりえ』(『文芸倶楽部』1895.9、のち各種全集収録)が、指定後の町のたたずまいを活写したものに永井荷風の『おかめ笹』(『中央公論』1918.1、『花月』同年5～11、のち各種全集収録)がある。荷風の『おかめ笹』(三)のくだりが町の様子を活写しているので、引用しておく。「小石川指ヶ谷町停留場で電車を降りる。紙屑問屋などが目につく何となくごみ／＼した通りである。右へ曲つて突当りのはづれは本郷西片町辺の崖地をひかへた裏通り板葺屋根のぼろ／＼に腐つた平屋立の長屋のみ立ちつゝいた間々に、ちらばらと新しい安普請の二階家、松なんぞ申訳らしく植込んだ家もあつて、白山の色町は其処此処に松月、のんき、おかめ、遊樂、祝ひ、いさみなんぞと云ふ灯をかゞやかし、金切声振絞る活惚(かっぱれ)に折から景気を添へてゐる家もあつた。」

79) 泉鏡花の『貧民倶楽部』(『北海道毎日新聞』1895.7、のち各種全集収録)は、鹿鳴館に参集する貴顕紳士と鮫ヶ橋のスラムの住人とを対照的に描いている。また、菊池寛の小説『東京行進曲』を映画化した溝口健二監督『東京行進曲』(日活、1929.5.31封切り)の、崖上のコートでテニスに興じる富豪の息子と崖下の貧家の娘との偶然の出会いを描いた冒頭シーンを想起してもよい。

流の住宅地なり」(傍点——引用者)とランクされているのであった⁸⁰⁾。

丸山福山町に地所を確保した忠之助は、すぐさま町内10番地に住む御影池梅吉なる棟梁に新築および改築(「二階家拾九坪半/但平家直シ六拾六坪半」)を依頼している。1900年10月5日付「内訳御積書」(2948.91円)がそれにあたる。ただしこの時点では、引越して間もない丸山福山町という町に忠之助の馴染みの薄かったことが、あて名に「河島様御掛り御中」とあることによって知られる。それから7年後の1907年(明治40)5月29日に、忠之助は同じ御影池梅吉に頼んで、再度の普請に取りかかっている。「御仕様見積書」に25坪弱、2346円余とある。棟梁も今度は施主の名前を間違えたりはしていない。

これら二度にわたる普請は忠之助が取得した13-1~21-2のどこに建てられたのか。地番が記されていないので定かではない。前者に「但平家直シ六拾六坪半」とあるのは貸家の手直しのこととおぼしいが、その実態も掴めない。

ところが幸便なことに、1931年(昭和6)9月、忠之助は自宅の屋敷内に私設下水道の敷設工事を行っている。それらの書類のなかに、地所全域にわたる家屋の青写真「川島忠之助私設下水道設計図」があった。それによれば、忠之助がはじめは自身も住い、のちに貸家として転用された20番地の屋敷の全貌を窺うことができる。それとは別に、1938年(昭和13)7月に忠之助が没したのちに遺産相続のために作成されたとおぼしい「土地台帳謄本写」と「家屋貸付台帳」とが残されている。後者には坪数・家賃・借家人名・所在地が書き上げられている。その上、裏面には各貸家の見取り図が描かれている。下水道工事のための青写真と「家屋貸付台帳」を重ね合わせることによって、川島忠之助家の本郷区丸山福山町の貸家経営の詳細を知ることができるのである。

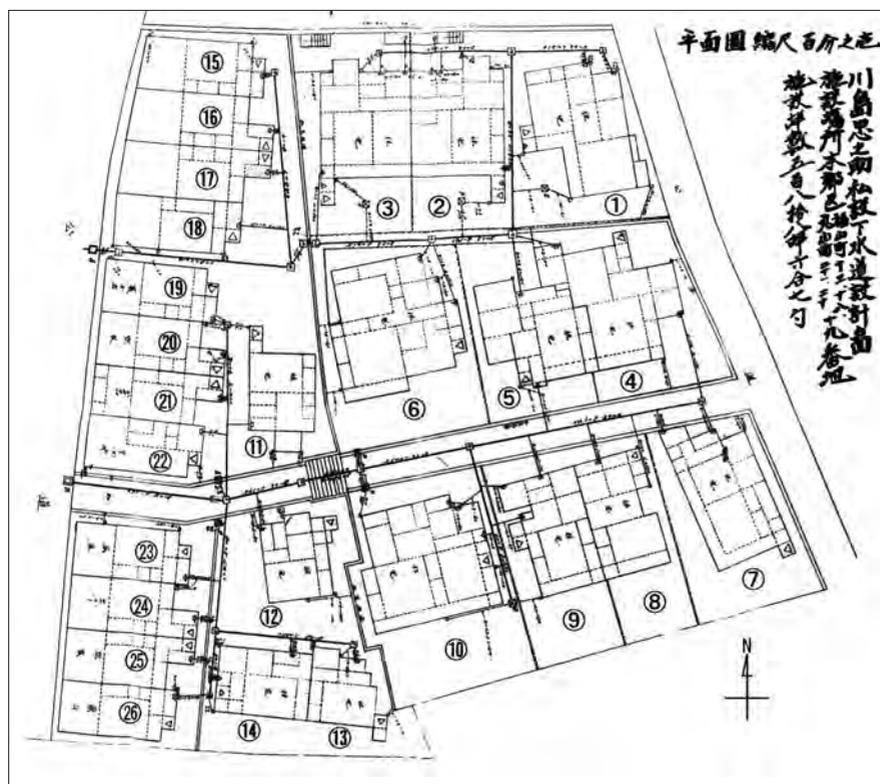
公道に面した13番地にあった店舗併用住宅群は、白山三業地に隣接していることもあって、薬局・カフェ・床屋・そば屋・かみゆい・菓子屋が軒を連ねている。いずれも三業地近傍の家業としてはいかにも似つかわしい。書き込みのない貸家群もまた、それらと似寄りの商いをしていたのであろう。いまは人びとの記憶から失われて久しい、このあたりの街のたたずまいとくらしのざわめきとがここからは立ち昇ってくるようである。欲を言えば、屋敷地と三業地のあいだの路地を見境もなく駆けまわる子どもたちの歓声も書き加えたいところだが、それは望蜀というものだろうか。

川島忠之助が本郷区丸山福山町に保有した資産は、宅地588.67坪、貸家13棟26軒に過ぎない。堀越角次郎家が東京市内に所有した4万8000坪に及びもつかないのはもちろんのこと、福井家の所有した150軒の数値にも届かない。その経営

80)『本郷区土地概評価』東京興信所、1922.1。

規模は江面嗣人が紹介している荒川信賢家の例⁸¹⁾にもっとも近いといえよう。早大出版部に勤めるかたわら小規模宅地の集積に努めた荒川家のケースでは、日露戦後から大正半ばにかけて約1100坪の土地を集約し、20数軒の貸家を建築している。別に職業を持っていたという前歴も、地所の取得時期や経営規模も、川島忠之助のばあいと大同小異である。20世紀前半の都市〈東京〉の市街地には、こうした小規模住宅の経営を兼職する数多くの人びとがいたのである。しかも、音羽町が護国寺の門前町として栄えた分、貸家の多くは公道に面して店舗併用住宅として建てられ、その奥を住居専用住宅が占めていた。川島忠之助家の貸家群もまた、白山三業地を挟んだ公道に面して店舗併用住宅が軒を連ね、その背後の崖上に住居専用住宅が位置しているのであった。

川島忠之助は銀行引退後も、貸家経営のみに専念していたわけではない。むしろ、それまでのキャリアを生かして、主として有価証券などの運用を図っていた



川島忠之助私設下水道設計図

81) 江面信賢「音羽町の大正期における借家経営」は、注75)に掲げた山口廣編『郊外住宅地の系譜』鹿島出版会、1987.11.30に所収。

節がある。それと併せて行われた貸家経営も、閑静な住宅専用地域におけるそれではなく、むしろ高利潤をあげる可能性の高い店舗併用住宅を軸として展開されていたのである。

3節で、1924年（大正13）に、1899年（明治32）以来四半世紀にわたって住み慣わしてきた本郷区丸山福山町から牛込区喜久井町に転居した理由を考えてみた。もちろん、それらの推測も十分に当を得てはいるのだろう。しかしそれにも増して、実務家の忠之助がコスト・パフォーマンスを念頭に置かなかつたはずはない。だからこそ、それなりに繁華な上に、近くに指ヶ谷町の電車停留所もあって都心に向かうに便利な本郷区丸山福山町の本邸を明け渡して、牛込区喜久井町の地に自宅を構えたのであろう。ここにもまた、福井家や荒川家と均しく、市井の小規模貸家経営の実態が仄見えるのであった。

[しおざき ふみお]

表3 本郷区丸山福山町借家一覧（1939年6月現在）

地番	家屋番号	階下坪数	二階坪数	延べ坪数	使 途	家賃(円)	入居年月日	借家人
21	①	16.250	7.00	23.250	住宅	45	1925. 5.15	小林藤次郎 ←中村達彦
	②	15.000	7.50	22.500	住宅	33	1934.12.16	佐川 茂男
	③	15.000	10.00	25.000	住宅	35	1935. 6.26	大立 忍
20	④	15.625	6.25	21.875	住宅	28	1933. 4. 3	氏永 正男
	⑤	11.625	6.25	17.875	住宅	25	1927. 1. 9	森田 三郎
	⑥	21.000	7.50	28.500	住宅	30	1937. 9. 5	藤森 達夫 (五女貞子の夫)
19	⑦	10.750	5.75	16.500	住宅	30	1935. 4. 1	長谷川石郎 →矢内樸太
	⑧	10.750	5.75	16.500	住宅	23	1935. 9.16	近藤 伊久
	⑨	11.000	6.25	17.250	住宅	24	1935.11.16	笠井 嘉治
	⑩	21.000	7.50	28.500	住宅	40	1930.11.27	山本伊得夫
13	⑪	8.750	5.00	13.750	住宅	20	1935. 2. 1	川村伝之助
	⑫	8.000	5.00	13.000	住宅	22	1935. 3.26	小野 栄吉
	⑬	6.220	4.75	10.970	住宅	16	1929. 4. 1	山口栄治郎
	⑭	8.750	6.00	14.750	住宅	18	1934. 2. 1	加藤 鉄雄
	⑮	9.410	6.00	15.410	店舗	23	1926. 5.16	綿貫 精三
	⑯	10.250	6.00	16.250	店舗	20	1934.11. 1	稲本龍三郎
	⑰	10.000	6.00	16.000	店舗	22	1928.11.15	稲本龍三郎
	⑱	9.250	6.00	15.250	店舗	25	1935. 4. 1	船田 好道
	⑲	9.000	6.00	15.000	店舗(菓子屋)	24	1937. 4. 3	徳永 武雄
	⑳	9.000	6.00	15.000	店舗	23	1939. 2.23	高野重太郎
	㉑	9.000	6.00	15.000	店舗(かみゆい)	20	1926. 4.26	石野 広
㉒	8.750	6.00	14.750	店舗(そば屋)	25	1934.11. 1	高 山男 →本間仁八	
㉓	9.750	6.00	15.750	店舗(床屋)	22	1928. 2. 4	伊藤敬次郎	
㉔	10.000	6.00	16.000	店舗(カフェー)	22	1930. 8. 1	佐藤 愛	
㉕	10.000	6.00	16.000	店舗	20	1935. 7. 1	高野重太郎	
㉖	9.750	6.00	15.750	店舗(薬局)	24	1935. 1. 1	高野重太郎	
合計		293.880	162.50	456.380		659		